（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第８輯

近畿自動車道和歌山線建設に伴う

芝ノ垣外遺跡

―― 発掘調査報告書 ――

１９８７．１．３１

大阪府教育委員会
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

遺跡全景

奈良時代遺構群

奈良時代土器群

序　　文

関西国際空港の建設にともなう文化財の調査を実施するため、発足した財団法人大阪府埋蔵文化財協会もはや２年をむかえた。新空港建設が大阪府にとって20世紀最後の大型プロジェクトであり、豊富に分布する泉州の文化財との調整が懸念されたが、幸いにも現在のところは地元の深い理解にもとずき、関係各位の皆様方の協力で、発掘調査も円滑に進んでいる。これには、各種調査を担当し文化財行政の一翼を担っている財大阪府埋蔵文化財協会のたゆまなき努力があることはいまさらいうまでもない。

さて、本書で報告する芝ノ垣外遺跡は岸和田市稲葉町に位置し、近畿自動車道あるいは都市計画道路磯之上山直線の建設計画に際しておこなわれた分布調査で発見された遺跡である。このたび、遺跡地に近畿自動車道和歌山線建設にともなう工事用進入路が必要となったため、昭和61年に試掘調査を実施したところ、埋蔵文化財の存在があきらかになったため、ただちに本調査に移行したものである。

発掘調査の結果は、担当者が本書にくわしく記述するところであるが、奈良時代のまっすぐな溝と柵もしくは塀が掘り出され、周辺の地形と考えあわせると、およそ100メートルにおよぶ直線的な区画が想定されるという。そして興味のあることは、この区画は現在の地表面にこん跡をとどめる条里地割とは合致しないことである。すなわち、調査地をふくむ山直地域の条里地割の施行時期が、奈良時代にまでさかのぼるのかどうか、といった問題に一石を投じる成果といえよう。

このほかにも、奈良時代の土器の構成における問題も提起されており、小面積の調査にもかかわらず、深い内容をもった遺跡ということができるようである。本報告書の出版を契機として、律令国家の本質にせまっていく論及がなされることを願っている。

昭和62年１月

大阪府教育委員会

文化財保護課長　吉　房　康　幸

財大阪府文化財センター
蔵　書
第16659号

序　　文

本協会が関西国際空港建設に伴う各種公共事業に先立つ埋蔵文化財の発掘調査を実施する機関として設立されて2年目を迎え調査事業を行う必要な体制をも充実することができたことは、大阪府教育委員会をはじめ近畿の各府県市教育委員会のご指導並びにご支援の賜ものであります。

今回、報告いたします芝ノ垣外遺跡は、岸和田市稲葉町に所在しており、近畿自動車道和歌山線建設に伴う工事用進入路建設に先立つ発掘調査であり、日本道路公団大阪建設局から委託を受けて実施した調査事業であります。

調査の方法は大阪府教育委員会の指示に基づき最初に試掘調査を実施し、その結果遺構・遺物が検出されたので、引き続いて工事に必要な範囲を発掘調査を実施したものであります。調査は昭和61年8月末に現地調査を終了しその後遺物整理を行いその成果を纏めたものであります。

今回の調査結果は、試掘調査の時に一部が検出されていたが、範囲を広げた調査の結果奈良時代の集落を取り囲む溝と柵が検出出来周辺の地形と柱穴群などからおよそ100m近くの区画を持った建物址或は館址の可能性がある遺構を検出した、この他の調査結果等から本山直地域の歴史を知る必要な歴史資料を得ることが出来、今後体系的な研究を行うための資料を得られた。

本調査を実施するにあたり、日本道路公団大阪建設局・日本道路公団大阪建設局岸和田工事事務所・大阪府教育委員会・岸和田市教育委員会、その他地元関係者に多大のご協力、ご支援をいただいたことに深く謝意を表します。今後も本協会の調査事業にご支援、ご指導をお願い申し上げます。

昭和62年1月

財団法人　大阪府埋蔵文化財協会
理事長　　浅　野　素　雄

16659

例　　言

1．本書は近畿自動車道和歌山線建設に伴う発掘調査のうち、岸和田市稲葉町に所在する芝ノ垣外遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は日本道路公団の委託を受けて、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。

3．調査は財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査課第6班が担当し、班長　武内雅人、技師　宮野淳一　駒井正明　張　洋一が現地調査にあたった。調査は昭和61年5月23日に着手し、同年8月30日に終了した。報告書作成作業は同年9月1日から昭和62年1月31日まで実施した。

4．現地調査の実施および整理作業にあたっては、日本道路公団岸和田工事事務所、稲葉町町会および岸和田市教育委員会　近藤利由氏各関係者のご協力、ご教示を得ることができた。

5．本書の執筆は以下の通り分担し、編集は駒井が行った。第Ⅰ章第1、2、3節　駒井、第Ⅱ章第1節　宮野、第Ⅱ章第2節　駒井、第Ⅲ章第1節　宮野、第Ⅲ章第2節　宮野・駒井、第Ⅲ章第3節　宮野、第Ⅲ章第4節　駒井、第Ⅳ章　武内

6．遺物写真の撮影・焼付については資料係長泉本知秀、高田充哲　小森和夫が担当した。

凡　　例

1．本書に掲載した遺構実測図の方位Nは、国土座標第VI系の座標北を示す。

2．本書に掲載した遺物実測図について、土器・土製品・木製品は縮小率1/4、石器は実寸に統一した。また、遺物実測図番号と図版の遺物番号は対応する。遺構実測図については、統一していない。

3．本調査においては、遺跡測量は航空写真による図化作業を実施し、本書に掲載した遺構配置図・遺構図はそれを原図とし作成した。遺構の法量については、実測による。

4．本書に掲載した地形分類図は、国土地理院発行の土地条件図のうち、「岸和田」（5万分の1　昭和45年）を原図とし作成した。

5．本書に掲載した遺跡分布図は、国土地理院発行の地形図のうち、「岸和田」（5万分の1　昭和45年）を使用した。

6．本書で使用した遺構名称と調査および整理作業段階での遺構名称は異なる。調査および整理作業段階では、本協会独自の遺構命名と記号による。その対照については、本文中に示す。

7．本書に示した遺跡の地区割については、大阪府作製の地域計画図（2,500分の1）を基にした本協会独自の地区割呼称と、現地で設定した地区名を併用している。具体的には本文に記す。

本　文　目　次

第Ⅰ章　調査に至る経過と方法……1
　第1節　調査に至る経過……1
　第2節　調査の経過……1
　第3節　調査の方法……5
第Ⅱ章　遺跡の環境……9
　第1節　地理的環境……9
　第2節　歴史的環境（付）岸和田市域遺跡文献一覧……11
第Ⅲ章　調査の成果……33
　第1節　層　序……33
　第2節　遺構と遺物……37
　第3節　包含層の遺物……57
　第4節　芝ノ垣外遺跡出土奈良時代土器について……64
第Ⅳ章　ま　と　め……74

挿　図　目　次

第1図　遺跡位置図
第2図　試掘グリッド配置図
第3図　調査区位置図
第4図　調査区地区割図
第5図　遺跡周辺地形分類図
第6図　岸和田市内遺跡分布図
第7図　A地区の層序
第8図　B地区の層序
第9図　C地区の層序
第10図　D地区の層序
第11図　F地区の層序
第12図　G地区の層序

第13図　段形成および整地状況断面図
第14図　A地区遺構配置図
第15図　溝6検出遺物
第16図　A地区奈良時代遺構配置図
第17図　溝7断面図
第18図　溝7検出遺物Ⅰ・須恵器
第19図　溝7検出遺物Ⅱ・土師器
第20図　溝7検出遺物Ⅲ・土師器
第21図　P7検出遺物
第22図　B地区遺構配置図
第23図　D地区遺構配置図
第24図　E・F地区遺構配置図
第25図　G地区遺構配置図
第26図　旧河道検出遺物
第27図　旧河道肩部検出杭
第28図　G地区旧河道断面図
第29図　包含層検出遺物Ⅰ・G地区ⅢC層
第30図　包含層検出遺物Ⅱ・Ⅲb層
第31図　包含層検出遺物Ⅲ・Ⅲa層
第32図　包含層検出遺物Ⅳ・石器
第33図　和泉郡内奈良時代遺跡分布図
第34図　岸和田市内の奈良時代土器Ⅰ・小松里廃寺
第35図　岸和田市内の奈良時代土器Ⅱ・小松里廃寺、吉井一之坪遺跡、
西大路遺跡、栄ノ池遺跡

表　目　次

第１表　試掘成果一覧表
第２表　遺構の種類と記号
第３表　遺構番号対照表
第４表　市内遺跡地名表
第５表　奈良時代土器法量グラフ
第６表　平城宮Ⅳ・Ⅴ法量グラフ
第７表　器種構成表

図　版　目　次

巻頭図版一　遺跡全景
巻頭図版二　奈良時代遺構群
巻頭図版三　奈良時代土器群

図版一　遺跡(1)　ａ遺跡全景（北から）　ｂ同上（東から）
図版二　遺跡(2)　ａ調査前状況（西から）　ｂ同上（東から）
図版三　Ａ地区遺構(1)　ａＡ地区遺構面（東から）　ｂＡ地区遺構面（西から）
図版四　Ａ地区遺構(2)　ａ溝７検出状況（北から）　ｂ溝７完掘状況（北から）
ｃ溝７および柱穴群（北東から）
図版五　Ａ地区遺構(3)　ａ溝７遺物検出状況（東から）　ｂ溝７北壁断面
図版六　Ａ地区遺物(1)
図版七　Ａ地区遺物(2)
図版八　Ａ地区遺物(3)
図版九　Ａ地区遺物(4)
図版十　Ａ地区遺物(5)
図版十一　Ｂ地区遺構　ａＢ地区遺構面（西から）　ｂ包含層形成状況
図版十二　Ｄ・Ｅ・Ｆ地区遺構　ａＤ地区遺構面（東から）

b E・F地区遺構面（東から）

図版十三　F地区遺構　a F地区第2遺構面（南東から）　b 同上（北から）

図版十四　G地区(1)　a III c 層遺物検出状況　b 自然河川肩部杭

c　G地区北壁断面（自然河川上面まで）

図版十五　G地区(2)　a　自然河川北壁断面（南から）

b　自然河川北壁断面（南から）

図版十六　包含層の遺物(1)

図版十七　包含層の遺物(2)

図版十八　包含層の遺物(3)

第Ⅰ章　調査の経過と方法

第1節　調査に至る経過

今回調査をおこなった芝ノ垣外遺跡は、大阪府岸和田市稲葉町に所在する。(第1図)当遺跡は昭和57年度に大阪府教育委員会がおこなった近畿自動車道和歌山線内の分布調査によって新たに発見され、蓮光寺遺跡と命名された。続く昭和58年度には、一部近畿自動車道に並行する府道磯之上山直線内の分布調査が同教育委員会によって行われ、報告書が刊行された。[1] それによると、本線の予定地である岸和田市磯之上町から同市積川町に至る約10kmの範囲はすべて遺物の散布が認められ、計16カ所の遺跡が確認されている。蓮光寺遺跡は、新規発見の遺跡として扱われ、その北半分を山直中遺跡、南半分を芝ノ垣外遺跡と命名し、その境界を市道に求めた。さらに、芝ノ垣外遺跡の範囲からは、古墳時代の土師器・江戸時代の陶磁器が採集され、奈良・平安時代遺物の存在もありうると指摘している。

さて、昭和61年度になると、近畿自動車道和歌山線建設に伴う工事用進入路建設が具体化する方向に動き出した。当遺跡内に進入路が設計されていたため、工事に先立ち日本道路公団と㈶大阪府埋蔵文化財協会の間で委託契約がかわされ、道路幅内の発掘調査が実施されることになった。

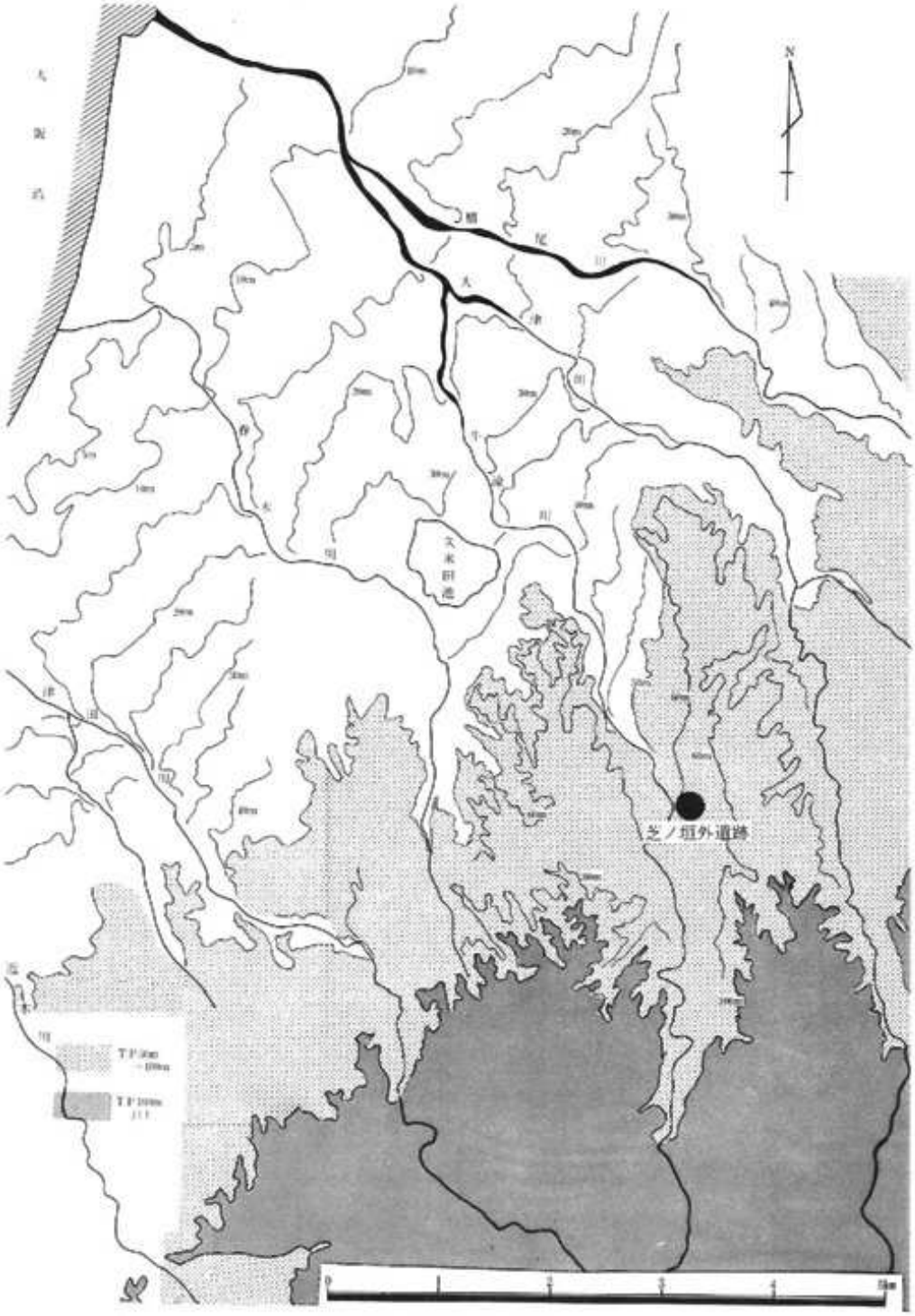
調査はまず遺跡範囲を明らかにするため、試掘調査をおこなったが、工事用進入路予定地内すべてにわたって、良好な包含層を確認したため、ただちに全面調査をおこなった。

なお調査地は、主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線（通称、牛滝街道）新大久保橋から東へ約200m までの範囲で、面積は約2,000m²である。

第2節　調 査 の 経 過

工事用道路予定地は東西約200m のほぼ直線であるが、東から西へ向けて傾斜をもつ段々畑となっている。調査の都合上、東の畑から順にA～Hまで地区割りをおこなった。

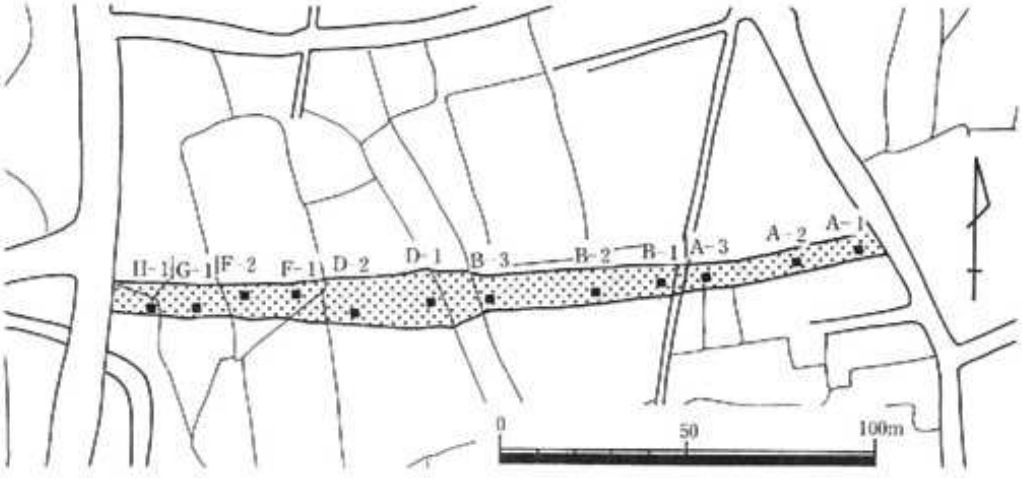
試掘調査では、各地区に1～3カ所ずつ、2m×2m のグリッドを計12カ所任意の位置に設定し、実施した。(第2・3図) その結果、耕作土・床土・包含層2～3層・地山という基本的層序がA～F地区で確認され、地山までの平均深度は約50cmであった。2～3層に



第1図　遺跡位置図

わたる包含層には、瓦器・土師器等が含まれていた。一方、G・H地区では1m余り掘り下げたにもかかわらず、地山を確認するには至らなかった。(第1表)

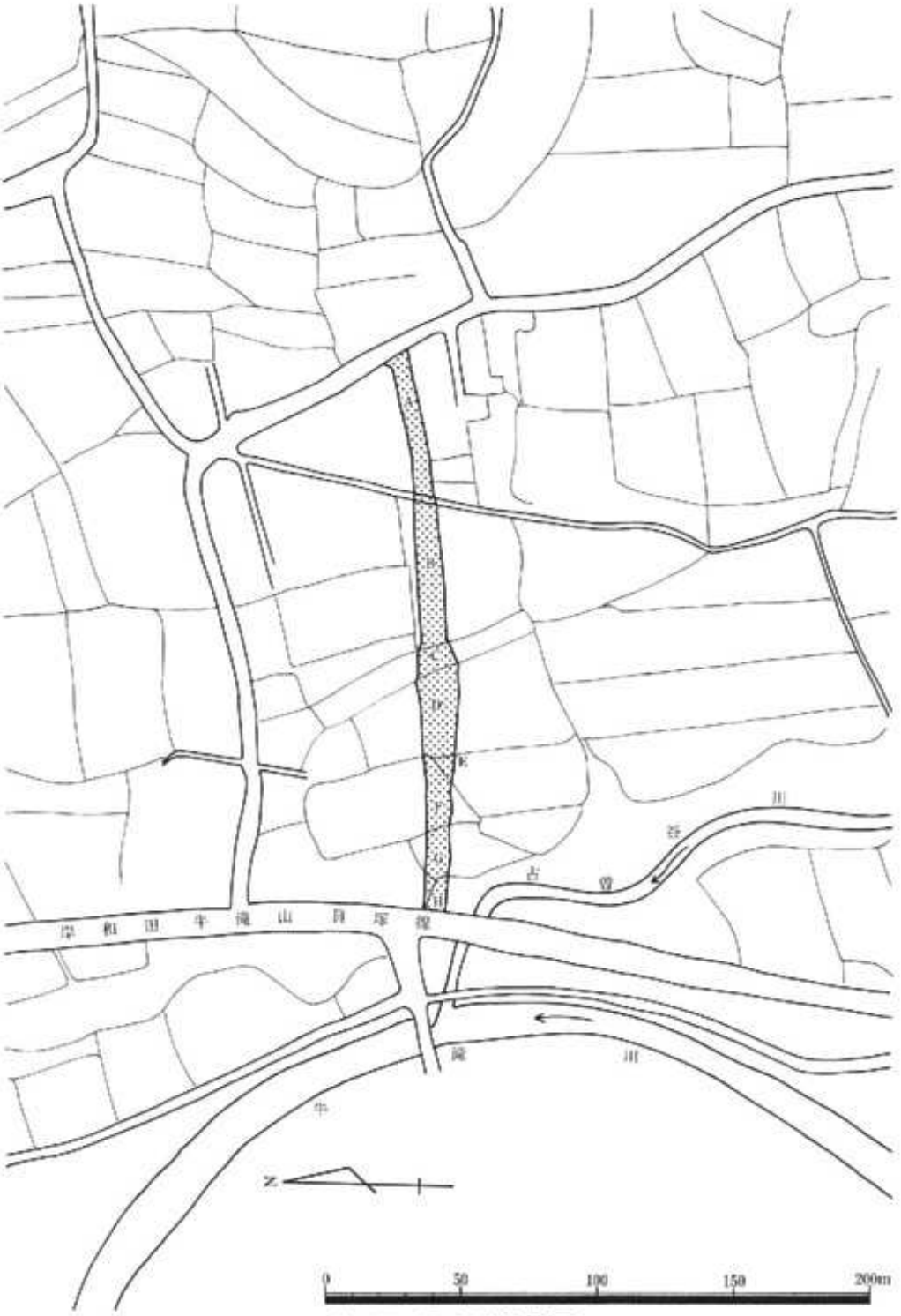
試掘の結果、良好な包含層が確認されたため、調査区設定ののち全面調査を開始した。調査は、B～H地区の機械掘削から開始し、B～F地区調査終了後、A地区の調査にかかった。遺構面はF地区のみ2面存在し、その他は地山のみであった。遺構はD地区に集中し、A・B・H地区で散見された。また、G・H地区には旧河道が検出された。遺構は溝・土壙・ピット・杭穴があり、なかでもA地区では奈良時代の土器を多量に含む溝とそれに並行する柱穴群が検出された。この奈良時代の遺構群は調査終了後、大阪府教育委員会、



第2図　試掘グリッド配置図

地区	グリッド	地区別	層序	包含層の状況	遺物	備考
A	A－1	J09LI	耕土・床土・包含層・包含層・地山	2層あり 厚さ約20cm	土師器	
	A－2	J09ME	〃	〃	〃	
	A－3	J08NX	〃	〃	〃	
B	B－1	J08NU	〃	2層あり 厚さ約30cm	なし	
	B－2	J08NQ	〃	2層あり 厚さ約20cm	〃	
	B－3	J08OJ	〃	〃		
D	D－1	J08OE	〃	2層あり 厚さ約25cm	瓦器・須恵器・土師器	
	D－2	J08PA	〃	〃		
F	F－1	J07OV	耕土・床土・包含層・包含層・包含層・地山	3層あり 厚さ約40cm	瓦器・土師器	
	F－2	J07OT	〃	〃	なし	
G	G－1	J07PO	耕土・床土・包含層・包含層・包含層・包含層・？	4層あり厚さ約70cm	瓦器・須恵器・土師器	地山未検出
H	E－1	J07PM	耕土・床土・包含層・包含層・無遺物層・無遺物層・？	2層あり 厚さ約30cm		〃

第1表　試掘成果一覧表



第3図　調査区位置図

日本道路公団、当協会の三者協議により、砂による埋め戻し保存が施工された。

このように小規模面積内の調査ではあったが、予想を上回る成果をおさめ、また天候にも恵まれ、8月30日に無事調査を終了した。

第3節　調査の方法

当協会では、発掘調査を行うにあたり、新平面直角座標の第VI座標系をもとにして作成した大阪府地域計画図を用い、独自の調査区内の地区割りをおこなっている。以下、その地区割り方法を芝ノ垣外遺跡にそって説明する。(第4図)

1　昭和60年度大阪府発行の1：2500地形図は、大阪府下を120等分したもので、芝ノ垣外遺跡はこの計画図の「大D－4－3」区画内に位置する。

2　この区画を12分割し、500m×500mの区割りを12設け、A～Lまで記号をつける。当遺跡はJに相当する。

3　その小区画は、さらに100m×100m方眼に分割することにより、25等分される。各々を01～25までの2桁の数字で示す。芝ノ垣外遺跡は07・08・09にまたがって存在する。

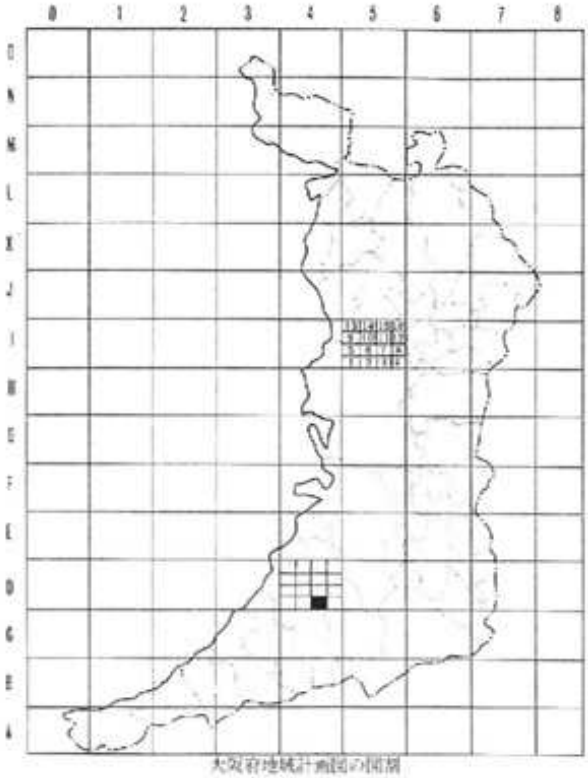
4　最後にこれを625等分することによって4m×4mの地区割りが完成する。この4m方眼は縦横各々A～Yまでのアルファベット25文字の組み合わせで表示される。そのときアルファベットは縦・横の順に記す。

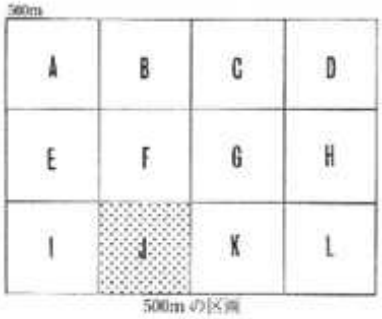
このようにして完成した4m方眼の交点は、第VI座標系上のX軸・Y軸座標を反映しており、調査地区内の地区割り線が、遺構実測の基準点としても利用できる。この4m×4m区画はおもに調査中にその効力を発揮する。

また、この4m×4m区画を基準にして調査時における包含層及び遺構内での遺物の取り上げや、遺構の位置を表現する。そのため、整理段階で区画ごとの出土頻度を得ることもできる。

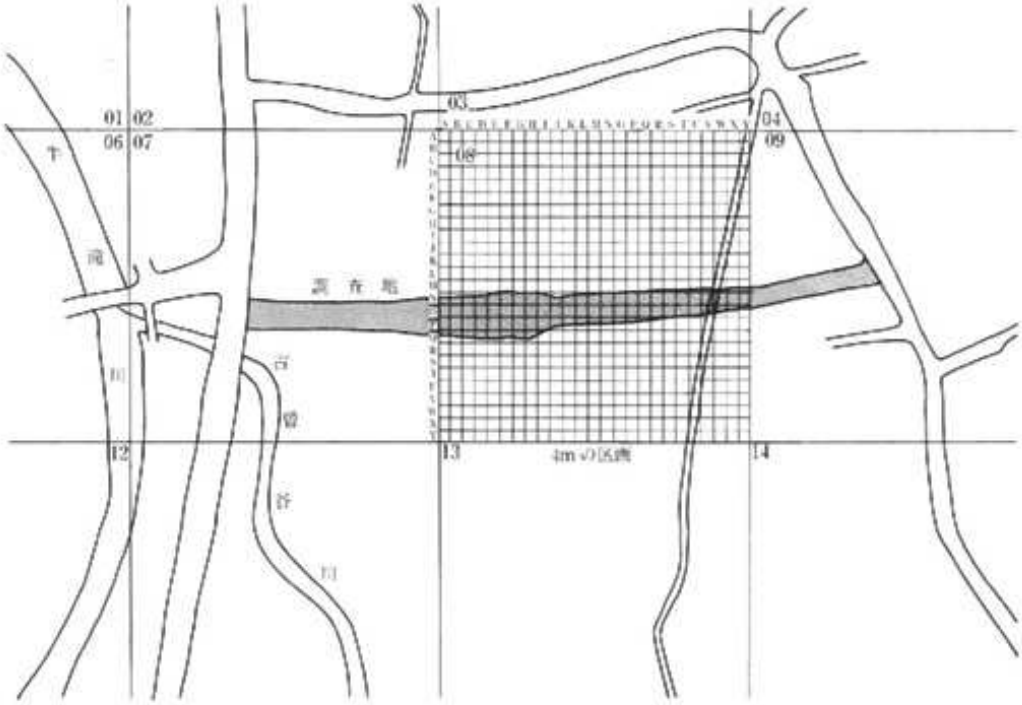
以上述べた地区割り方法を用いて芝ノ垣外遺跡を表現すると、大D－4－3、J07、J08、J09地区となる。この表記方法は先述のように大阪府下でのみ有効な方法であるため、他の府県では適用できない。しかし、第VI座標系を基準に作成したものであるから、国土座標を用いても表記できることは言うまでもない。

なお第2節で述べたように、調査中に調査者が地形に応じて設定したA～H地区という





大D－4－3 J



第4図　調査区地区割図

道　路	OA	Avenue	土器溜・瓦溜	OT	Trash
建　物	OB	Building	井　戸	OW	Well
竪穴住居	OD	Dwelling	苑　池	OY	Yard
土壘・石壘	OE	Earth work	水田・畑	OZ	
柵・塀	OF	Fence	祭　祀	OC	Ceremony
炉	OH	Hearth	窯	OK	Kiln
水利施設	OI	Irrigation	池・沼	OL	Lake
土　壙	OO	Orifice	貝　塚	OM	Midden
ピット	OP	Pit	墓　地	OG	Grave
河　川	OR	River	埋葬施設	OU	Urn
溝	OS	Stream	その他・不明	OX	Extra

第2表　遺構の種類と記号

呼称がある。本文中では、この地区割りを主に用いることをあらかじめことわっておく。

さて、現在大阪府下では、多数の団体・組織が年間を通じて大小3,000件余の発掘調査を行っている。そこで用いられている遺構表記のための記号は、奈良国立文化財研究所が採用しているものを基準に、各々独自に改良したものが多く、混乱をきたしているのが現状である。そこで当協会では、他の組織の記号と混乱しないよう独自の表記方法を採用している。(第2表) 実際の調査にあたっては、各々の記号の前に発見された遺構順に1から通し番号をふって用いる。(例　1—OS、2—OO、……136—OP)

しかし、これはあくまで発掘調査、整理段階で使用する表記であり、報告書記載にあたってこれをそのまま用いると、第三者の混乱をまねく恐れがある。そこで今回の報告書作成にあたっては、次ページに掲げる対照表（第3表）記述のように整理した形で記載することとする。

註

(1) 大阪府教育委員会「付章、府道磯之上山直線予定地内分布調査の結果」『三田遺跡試掘調査概要 ——府道磯之上山直線建設に伴う試掘調査概要——』1985年

※遺構番号の表記について

今回の調査では、総数199基の遺構を検出したが、遺構でないと判断したもの2基を欠番とし、記録した遺構は197基を数える。内訳は、溝（OS）が35条、土壙（OO）が6基、柱穴・杭跡（OP）が150基、河川（OR）が1条、不明遺構（OX）が5基となっている。

本書では、前述のように新たに遺構種類ごとに通し番号で表記し、記述した。しかし、これは重要な遺構と、報文説明中の必要なものに限っており、大多数の遺構には番号を付していない。もちろん、それらの遺構についての規模、埋土、遺物等の記録はすべて当協会に保管している。

遺構・遺物の情報の検索にあたっては、本書で新たに番号を付したものについては新番号でも可能であるが、基本的な整理システムにおいては旧番号が重視されている。従って、以下に本書記載の遺構番号と整理段階での番号の対照表を示し、参考に供したい。

溝（OS）		15	15	2	157	自然河川（OR）
(新)1	192	16	16	3	158	113
2	186	17	17	4	156	
3	184	18	18	5	153	
4	169	19	19	6	150	
5	165	20	39	7	151	
6	152	21	21	8	149	
7	148	22	56	9	154	
8	4	23	111	10	155	
9	5～7	24	85	11	143	
10	8・9	25	137	12	144	
11	12	26	138	13	146	
12	11	27	140	土壙（OO）		
13	12	ピット（OP）		1	2	
14	14	1	162	2	139	

第3表　遺構番号対照表

第II章　遺跡の環境

第1節　地理的環境

岸和田市の位置する泉州地域の地形は、大別すると、和泉山脈、和泉山脈から派生して北西にのびる丘陵地帯、平地部という3つの景観に分けられる。丘陵は、和泉山脈に源を有する河川によって開析され、平地部に狭小な沖積地を形成している。

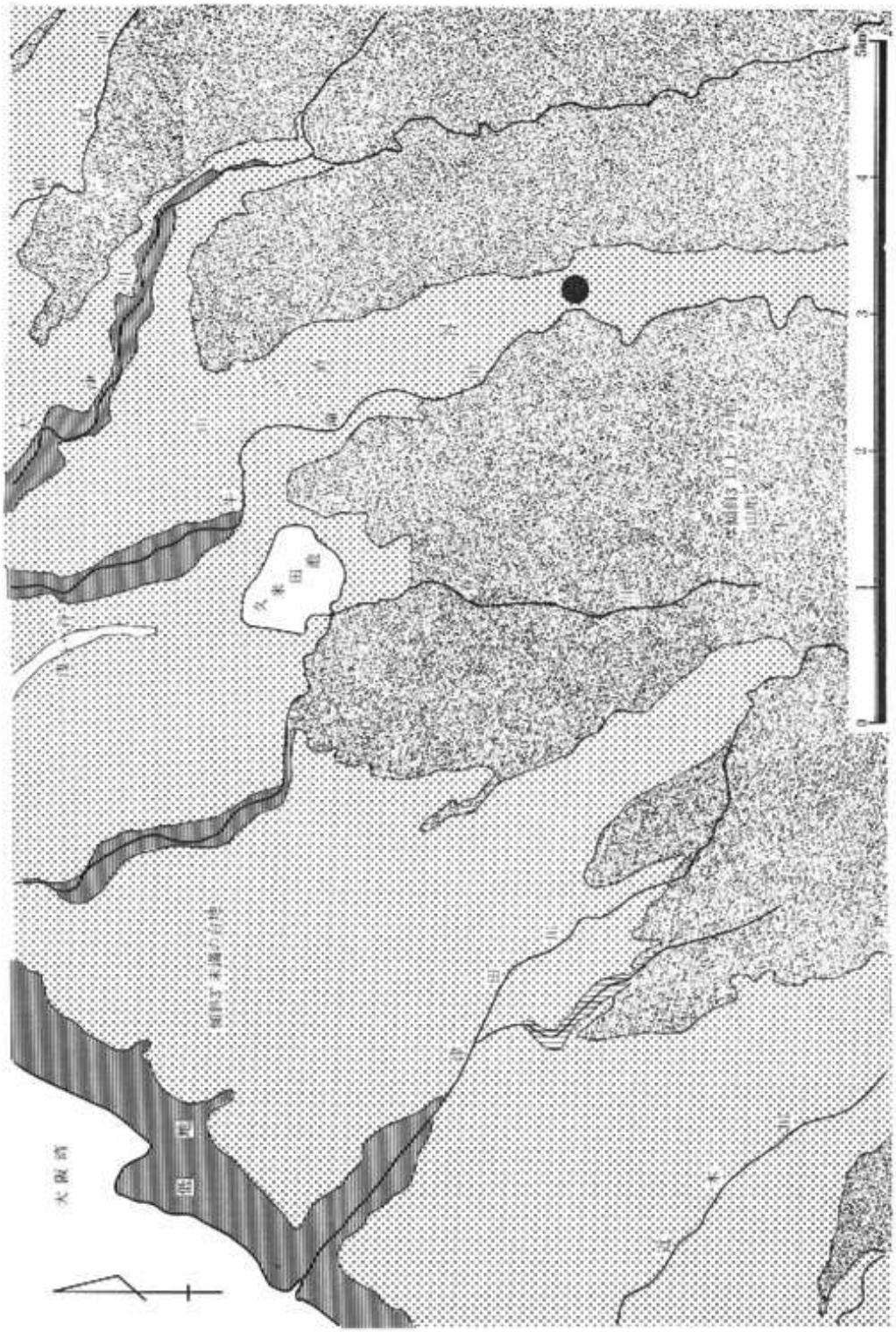
岸和田市域にも北から、牛滝川、春木川、津田川の3本の主要河川が北西流し、丘陵地帯にそれぞれ、山直谷、尾生谷、阿間河谷を発達させている。芝ノ垣外遺跡の所在する稲葉町は、山直谷の中央付近、牛滝川右岸に発達した河岸段丘に位置する。左岸には段丘は発達しておらず、牛滝川を西縁に、東側の丘陵裾部までの約400mの間が緩傾斜面となっている。(第5図)

調査区は、牛滝川が大きく蛇行した部分の東方約50mの地点から東西に200mの間で、現況は牛滝川に向かって下る段々畑となっており、段には一部段丘崖を利用している。調査区東端の標高はT.P.65.6m、西端でT.P.59.6mである。また、この地域は、サヌカイトの原石散布で知られる通称古曽谷の谷口にもあたり、調査区西方で古曽谷川が牛滝川に合流している。古曽谷川は改修工事がなされ、現在は狭い河道を呈しているにすぎないが、調査成果の項にも述べるように、調査区西端で旧河道を検出しており、景観復原に重要な要素となろう。現在の耕作用水利も主に古曽谷川からの揚水であり、過去にさかのぼっても、生活用水の源であったことが推察できる。

牛滝川の流路変化、微地形の変化は考えられるところであるが、人為的な大きな地形改変は認められず、ほぼ原景観に近い状況と見做してよいと思われる。その状況は、三田遺跡の所在する三田町付近、すなわち、山直谷の谷口部分までは同様であろう。

地質的に見ると、遺跡周辺の傾斜地は低位段丘にあたり、背後の丘陵は大阪層群によって形成されている。調査の結果でも、A地区西端からB地区、C地区、そしてF地区の第2遺構面のベース層（地山）には礫が多量に含まれており、段丘礫層に相当するものと考えられる。従って、帯水層も低い位置にあるため井戸の開削には適しておらず、前述のように河川水の重要性は高かったに違いない。

気候的には暖帯であり、照葉樹林帯に属している。



第5図　遺跡周辺地形分類図（1/5万）

第2節　歴史的環境

最近岸和田市教育委員会が「岸和田市遺跡分布図」[1]を、また大阪府教育委員会が「大阪府文化財分布図」[2]を相次いで作成した。それによると、岸和田市内には172カ所にのぼる遺跡が確認されており、10年前の約2倍に増加している。市内に点在する遺跡が本格的に調査され始めたのは、1970年代に入ってからのことである。しかしそれ以前から地元在住の玉谷哲氏による精力的な資料採集がおこなわれ、各時代の貴重な遺物が「市内出土遺物図録玉谷哲所蔵資料」に収録されている。[3]以下、時代順に代表的遺跡を概観するが、遺跡名は大阪府教育委員会の採用する名称で記載することをあらかじめことわっておく。(第6図、第4表)

岸和田市内の先土器時代遺跡は、まだ本格的な調査がおこなわれていない。しかし、前述の玉谷氏採集資料に含まれる葛城山頂遺跡、岡山遺跡、琴山遺跡の石器類は、国府型のナイフ形石器である。このうち葛城山頂遺跡は標高850mの高所に位置し、縄文時代、古墳時代の遺物も採集されている。

縄文時代の遺跡は現在数カ所知られているが、唯一発掘調査のおこなわれた春木八幡山遺跡からは、縄文時代中期から晩期に至る土器を出土している。また、箕土路遺跡からも第2阪和国道建設工事中に中期前半の土器が出土している。縄文時代の遺跡は、低地部に集中しているが、葛城山頂にも存在すること、また芝ノ垣外遺跡の南、「こそ谷」にサヌカイト原石散布地がみられることから、山直谷、尾生谷、阿間河谷付近にも今後発見される可能性は高い。

弥生時代遺跡は、春木八幡山遺跡、春木天の川遺跡、栄ノ池遺跡、下池田遺跡、土生遺跡、畑町遺跡等多数知られている。また、下池田遺跡、栄ノ池遺跡、畑町遺跡は、最近も頻繁に調査がおこなわれている。なかでも下池田遺跡は、最近陸橋を持つ円形周溝墓が検出され、注目を受けている。一方、流木土田山遺跡、神於おぐら谷遺跡からは、銅鐸が出土している。

山間部を除く市内ほぼ全域には、多数の古墳が点在する。なかでも著名なものは、国史跡の前方後円墳摩湯山古墳、久米田古墳群と一般に総称される久米田池周辺に点在する古墳等である。その他の古墳時代の遺跡は、栄ノ池遺跡や吉井一之坪遺跡が知られているが、最近調査がおこなわれた府道磯之上山直線予定地内の三田遺跡では、6世紀後半頃の集落が検出されている。また、久米田池内、合池付近には須恵器窯が発見されている。久米田池内須恵器窯跡出土の須恵器は5世紀後半から6世紀にかけてのものが、合池窯跡は6世紀の須恵器がみられる。

奈良時代になると岸和田市のある大阪西南部は和泉国と呼ばれ、716年河内国の大鳥郡、和泉郡、日根郡を割いて設けられた和泉監が基礎となっている。この和泉監は740年廃され、河内国に併合されたのち、757年に再び分立して和泉国となった。芝ノ垣外遺跡が属していた和泉国和泉郡は、現在の和泉市、泉大津市、岸和田市の全域と、貝塚市の一部から成り立っていた。郡内は、「倭名類聚抄」によると10郷（信太郷、上泉郷、下泉郷、軽部郷、坂本郷、池田郷、八木郷、山直郷、掃守郷、木島郷）に分かれていたとされ、その後の研究で、和泉国府のほかに古代寺院が何カ所か存在していたと考えられている。1郷に1カ寺存在していたとされる古代寺院の中で最古のものは、いずれも素弁8葉軒丸瓦をもつ坂本郷の禅寂寺（阪本寺）と信太郷の観音寺跡（信太寺）とされる。[4]

岸和田市内は、軽部、八木、掃守、木島、山直郷の5郷に分かれ、まず春木廃寺、小松里廃寺、別所廃寺が建立され、その後堂浦廃寺、堂ノ後廃寺、田治米廃寺等が建立されていったものと思われる。しかし、これらの寺院跡は、観音寺跡、禅寂寺等一部の寺院を除いてほとんど発掘調査がおこなわれていない。そのため寺院研究の現状は、専ら軒瓦中心となり、総合的検討が充分に加えられない状態である。その意味からも広瀬和雄氏がおこなっている古代寺院と集落の検討は、重要なテーマと考えられる。[5]

一方、和泉郡内に施行された条里についても徐々に研究されはじめている。

このように最近の発掘調査の成果はめざましく、岸和田市内の総合的な歴史的環境の復元も可能となってきた。また、今までほとんど遺跡の存在が知られていなかった山直谷の調査も徐々にはじまり、重要な資料が蓄積されつつある。

しかし、これらの重要な成果が、ほとんど開発に伴って得られたものであることも忘れてはならない。岸和田市においても、かつて下池田遺跡保存運動が展開されたことは、記憶に新しい。今後、府道熊之上山直線、近畿自動車道和歌山線建設に伴う文化財行政の対応が注目されるところである。

註

1．岸和田市教育委員会『岸和田市遺跡分布図』　1986

2．大阪府教育委員会『大阪府文化財分布図』　1986

3．岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2　1976

4．藤沢一夫「摂河泉出土古瓦の研究――編年的様式の一試企――」『考古学評論　第3輯・仏教考古学論叢』　東京考古学会　1941

5．広瀬和雄「中世への胎動」『岩波講座　日本考古学6　変化と画期』　岩波書店　1986

第6図　岸和田市内遺跡分布図

番号	遺　跡　名	番号	遺　跡　名
1	春木天の川遺跡	46	赤山古墳群
2	春木八幡山遺跡	48	岡山矢取遺跡
3	春木廃寺	49	重の原遺跡
4	春木廃寺瓦窯跡	50	岡山八ツ川遺跡
5	礼拝塚古墳	51	どぞく遺跡
6	牛神塚古墳	52	ちご池東遺跡
7	権現山古墳	53	摩湯山古墳
8	八幡古墳	54	馬子塚古墳
9	吉井一之坪遺跡	55	東山古墳
10	吉井上品寺跡	56	三田古墳
11	夜疑廃寺	57	たな川塚古墳
12	箕土路遺跡	58	琴山遺跡
13	今木廃寺	59	三本松下遺跡
14	丸山古墳	60	神明山古墳
15	長坂古墳	61	堂ノ後廃寺
16	小松里廃寺	62	三合塚古墳
17	加守三昧山遺跡	63	畑町遺跡
18	兵主廃寺	67	堂浦廃寺
19	宮本遺跡	68	天神山廃寺
20	別所廃寺	69	天神山古墳
21	別所熊野町遺跡	70	牛神塚古墳
22	狐塚古墳	71	流木土田山遺跡
23	狐塚遺跡	72	福塚古墳
24	武蓮廃寺	73	丸山古墳
25	狐塚古墳	74	大山大塚古墳
26	浄行寺古墳	75	義犬塚古墳
27	志阿弥法師塚古墳	76	八代寺廃寺
28	女郎塚古墳	77	尾崎遺跡
29	風吹山古墳	78	儀平山古墳
30	無名塚古墳	79	南ノ坊古墳
31	貝吹山古墳	80	積川廃寺
32	光明塚古墳	81	神於寺跡
33	池尻古墳	82	神於おぐら谷遺跡
34	久米田寺跡	83	河合古墓
35	池尻町遺跡	84	経塚古墳
37	田治米廃寺	85	葛城山頂遺跡
38	田治米宮内遺跡	86	池尻円筒棺出土地
39	久米田池須恵器窯跡	87	来迎寺跡
40	松尾池尻埴輪窯跡	88	穴口廃寺
41	西山古墳	89	岸和田古城跡
42	お立場古墳	90	犬飼堂跡
43	馬塚古墳	91	栄ノ池遺跡
44	小金塚古墳	92	今城跡
45	重の原古墳	93	イナリ古墳

番号	遺　跡　名	番号	遺　跡　名
94	合池窯跡	138	板橋遺跡
95	道ノ池遺跡	139	壺山遺跡
96	岡山御坊跡	140	唐池遺跡
97	楠本神社古墳	141	笠松遺跡
98	檜ケ谷城跡	142	作遺跡
99	落合城跡	143	トビガ谷遺跡
100	福田城跡	144	箱谷古墳
101	稲葉城跡	145	向山古墳群
102	土居城跡	146	蛇塚古墳
103	堂ケ峯廃寺	147	阿間ケ滝墓地一石五輪塔群
104	山直神社遺跡	148	稲葉墓地
105	河合城跡	150	具足遺跡
106	内畑城跡	151	四方寺遺跡
107	大沢城跡	153	山直墓地
108	岡堂跡	154	二ツ池遺跡
109	大師淵遺跡	156	半田遺跡
110	石塚（五塚）古墳	157	上松中尾遺跡
111	神福寺跡	158	岡崎古墳群
112	転法輪寺跡	159	白鳥遺跡
113	勝福寺跡	160	西大路遺跡
114	岸和田城跡	161	今木遺跡
115	高山古墳（伝楠本城）	162	軽部池西遺跡
116	神ノ木山遺跡	163	山ノ内遺跡
117	今木城跡	164	山直北遺跡
118	狐塚古墳	165	三田遺跡
119	行合堂跡（観音堂跡）	168	上フジ遺跡
121	川原古銭出土地	169	二俣池北遺跡
122	大町遺跡	170	水込遺跡
123	久米田池内遺跡	171	黒石遺跡
124	大威徳寺跡	172	山直中遺跡
125	仏谷尾遺跡	173	蓮華光寺跡
126	沼天神社遺跡	174	芝ノ垣外遺跡
127	下池田遺跡	175	神於寺瓦窯跡
128	小寺遺跡	176	土井ノ木遺跡
129	磯之上遺跡	177	中之社遺跡
130	額原遺跡	178	宮の後遺跡
131	土生遺跡	180	岸和田城遺跡
132	上松台墓地	181	意賀美神社遺跡
134	合池遺跡	182	上白原遺跡
135	上松遺跡	183	沢峰遺跡
136	岡山遺跡	184	荒木土塁跡
137	三田墓地	185	八木城跡

第4表　市内遺跡地名表

※　岸和田市内遺跡分布図と岸和田市域遺跡文献一覧について

今回作成した岸和田市内遺跡分布図は、1986年度大阪府教育委員会で新たに作成された「大阪府文化財分布図」をもとに、国土地理院発行の50000分の1地形図に記入したものである。市内には現在172遺跡確認されているが、それらすべては点で表現している。なお、遺跡番号も上記の分布図に準じている。

分布図地名表は、遺跡番号、遺跡名のみ記載している。遺跡名は分布図で用いられている名称を採用したが、その読みは今回省略した。また、各遺跡の所在地、時期、性格についても、現在「大阪府文化財地名表」が未発行のため記載を見合わせた。

岸和田市域遺跡文献一覧は、おもに戦後発行された市内遺跡に関連する報告書、雑誌等をできる限り収集したものであり、その数は約400にのぼる。これは、遺跡単位の文献を発行年順にならべたもので、遺跡名の横に遺跡番号をつけ、地名表との対応をはかっている。項目は基本的に発行年、著者または編集機関、文名、書名の4項目からなっている。その中で、1冊の書物に複数遺跡が記述されている場合は、各々の遺跡に記載し、大阪府史に関しては特に記載ページをあげた。なお、文献中の遺跡名と現在の遺跡名との対応関係が判明しなかったものについては省略している。

岸和田市域遺跡文献一覧

合池遺跡　134

1973　岡本一士「上松遺跡」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告書』　帥元興寺仏教民俗資料研究所

合池窯跡　94

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　合池窯跡」『岸和田市史』第1巻

赤山古墳群　46

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　赤山古墳群」『岸和田市史』第1巻

穴口廃寺　88

1978　大阪府史編集委員会「加守廃寺」『大阪府史』第1巻　P917

阿間ケ滝墓地一石五輪塔群　147

1973　岡本一士「阿間ケ滝墓地所在一石五輪塔群」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告書』　帥元興寺仏教民俗資料研究所

池尻古墳　33

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　池尻古墳」『岸和田市史』第1巻

池尻町遺跡　35

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　池尻町遺跡」『岸和田市史』第1巻

石塚古墳　110

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　石塚」『岸和田市史』第1巻

磯之上遺跡　129

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　磯上遺跡」『岸和田市史』第1巻

稲葉城　101

1973　松井忠春「宮山遺跡」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告書』　帥元興寺仏教民俗資料研究所

稲葉墓地　148

1973　松井忠春「稲葉墓地」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告書』　帥元興寺仏教民俗資料研究所

イナリ古墳　93

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　稲荷山古墳」『岸和田市史』第1巻

犬飼堂跡　90

1981　岸和田市教育委員会「犬飼堂廃寺」『岸和田の文化財　写真集（市内出土瓦）V』

今木遺跡　161

1985　大阪府教育委員会「付章　府道磯之上山直線予定地内分布調査の結果」『三田遺跡試掘調査概要

——府道磯之上山直線建設工事に伴う試掘調査概要——』

1986　㈶大阪府埋蔵文化財協会「西大路遺跡・今木遺跡」『泉州の遺跡——㈶大阪府埋蔵文化財協会　昭和60年度発掘調査成果展——』

今木城跡　117

1985　玉谷　哲「今木城跡」『日本城郭大系』12　大阪・兵庫　新人物往来社

今木廃寺　13

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1981　岸和田市教育委員会『岸和田の文化財　写真集（市内出土瓦）V』

1983　岸和田市教育委員会『岸和田市文化財調査概要8・昭和57年度発掘調査概要』

1985　㈶大阪府埋蔵文化財協会『西大路遺跡・今木廃寺遺跡——発掘調査事業報告書——』

1985　大阪府教育委員会『今木廃寺発掘調査概要』

1986　泉州の自然と文化財を守る連絡会議「今木廃寺」『青海波』第3号

今城跡　92

1985　玉谷　哲「今城跡」『日本城郭大系』12　大阪・兵庫　新人物往来社

牛神塚古墳　70

1973　岡本一士「天神山古墳群　第5号墳　牛神塚古墳」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告書』　㈶元興寺仏教民俗資料研究所

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　牛神古墳」『岸和田市史』第1巻

牛神塚古墳　6

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　牛神古墳」『岸和田市史』第1巻

内畑城跡　106

1985　玉谷　哲「内畑城跡」『日本城郭大系』12　大阪・兵庫　新人物往来社

馬塚古墳　43

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　馬塚古墳」『岸和田市史』第1巻

栄ノ池遺跡　91

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1979　岸和田遺跡調査会『栄の池遺跡』

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　栄の池東遺跡」『岸和田市史』第1巻

1980　村上博史「栄ノ池遺跡の調査」『摂河泉文化資料』22　摂河泉文庫

1980　岸和田市教育委員会『岸和田市文化財調査概要8・土生遺跡他発掘調査概要』

1980　岸和田市教育委員会『岸和田の文化財　写真集（市内出土土器）IV』

1980　岸和田市教育委員会『岸和田の文化財　写真集（市内出土石器）VI』

1986　渡辺昌宏「泉州の縄文時代」栄ノ池東遺跡『青海波』第3号　泉州の自然と文化財を守る連絡会議

1986　直木孝次郎・森　杉夫編「栄ノ池遺跡」『大阪府の地名・日本歴史地名大系28』　平凡社

大沢城跡　107

1985　玉谷　哲「大沢城跡」『日本城郭大系』12　大阪・兵庫　新人物往来社

大町遺跡　122

1979　岸和田市史編纂委員会「第５章　遺跡各説　大町遺跡」『岸和田市史』第１巻

大山大塚古墳　74

1973　岡本一士「天神山古墳群　第２号墳　大山大塚古墳」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告書』　帥元興寺仏教民俗資料研究所

1979　岸和田市史編纂委員会「第５章　遺跡各説　大山大塚古墳」『岸和田市史』第１巻

岡堂跡　108

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』２

岡山遺跡　136

1973　松井忠春「岡山遺跡」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告書』　帥元興寺仏教民俗資料研究所

1973　松井忠春「西山遺跡」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告書』　帥元興寺仏教民俗資料研究所

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』２

1978　大阪府史編集委員会「西山遺跡」『大阪府史』第１巻　P181、P307

1979　岸和田市史編纂委員会「第５章　遺跡各説　西山遺跡」『岸和田市史』第１巻

岡山御坊跡　96

1973　松井忠春「岡山御坊跡」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告書』　帥元興寺仏教民俗資料研究所

1985　玉谷　哲「岡山御坊」『日本城郭大系』12　大阪・兵庫　新人物往来社

岡山八ツ川遺跡　50

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』２

1978　大阪府史編集委員会「岡山八ツ川遺跡」『大阪府史』第１巻　P543

1979　岸和田市編纂委員会「第５章　遺跡各説　岡山八ツ川遺跡」『岸和田市史』第１巻

岡山矢取遺跡　48

1976　岸和田市編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』２

1978　大阪府史編集委員会「岡山矢取遺跡」『大阪府史』第１巻　P543

1979　岸和田市史編纂委員会「第５章　遺跡各説　岡山矢取遺跡」『岸和田市史』第１巻

尾崎遺跡　77

1973　岡本一士「尾崎遺跡」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告書』　帥元興寺仏教民俗資料研究所

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』２

1978　大阪府史編集委員会「尾崎遺跡」『大阪府史』第１巻　P. P307～308

お立場古墳　42

1979　岸和田市史編纂委員会「第５章　遺跡各説　お立場古墳」『岸和田市史』第１巻

落合城跡　99

1973　岡本一士「落合城跡」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告』　帰元興寺仏教民俗資料研究所

1985　玉谷　哲「落合城跡」『日本城郭大系』12　大阪・兵庫　新人物往来社

貝吹山古墳　31

1979　岸和田市史編纂委員会「第５章　遺跡各説　久米田貝吹山古墳」『岸和田市史』第１巻

1986　直木孝次郎・森　杉夫編「貝吹山古墳」『大阪府の地名・日本歴史地名大系28』　平凡社

笠松遺跡　141

1973　岡本一士「笠松遺跡」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告』　帰元興寺仏教民俗資料研究所

風吹山古墳　29

1979　岸和田市史編纂委員会「第５章　遺跡各説　風吹山古墳下層遺跡」『岸和田市史』第１巻

1979　岸和田市史編纂委員会「第５章　遺跡各説　風吹山古墳」『岸和田市史』第１巻

1986　直木孝次郎・森　杉夫編「風吹山古墳」『大阪府の地名・日本歴史地名大系28』　平凡社

葛城山頂遺跡　85

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』２

1978　大阪府史編集委員会「葛城山頂遺跡」『大阪府史』第１巻　P181、244、245、307

1979　岸和田市史編纂委員会「第５章　遺跡各説　葛城山頂遺跡」『岸和田市史』第１巻

1986　渡辺昌宏「泉州の縄文時代」葛城山頂遺跡『青海波』第３号　泉州の自然と文化財を守る連絡会議

1986　直木孝次郎・森　杉夫編「葛城山頂遺跡」『大阪府の地名・日本歴史地名大系28』　平凡社

上フジ遺跡　168

1985　大阪府教育委員会「付章　府道磯之上山直線予定地内分布調査の結果」『三田遺跡試掘調査概要――府道磯之上山直線建設工事に伴う試掘調査概要――』

加守三昧山遺跡　17

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』２

1978　大阪府史編集委員会「加守三昧山遺跡」『大阪府史』第１巻　P. P.315～321

1979　岸和田市史編纂委員会「第５章　遺跡各説　加守三昧山遺跡」『岸和田市史』第１巻

1979　岸和田市教育委員会『岸和田の文化財　写真集（市内出土石器）VI』

1986　直木孝次郎・森　杉夫編「加守三昧山遺跡」『大阪府の地名・日本歴史地名大系28』　平凡社

唐池遺跡　140

1973　岡本一士「唐池遺跡」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告』　帰元興寺仏教民俗資料研究所

軽部池西遺跡　162

1985　大阪府教育委員会『軽部池西遺跡試掘調査概要報告書・II　――府道磯之上山直線建設に伴う試掘調査』

1985　大阪府教育委員会「付章　府道磯之上山直線予定地内分布調査の結果」『三田遺跡試掘調査概要――府道磯之上山直線建設工事に伴う試掘調査概要――』

1986　㈶大阪府埋蔵文化財協会「軽部池西遺跡」『泉州の遺跡――㈶大阪府埋蔵文化財協会　昭和60年度発掘調査成果展――』

1986　渡辺昌宏「泉州の縄文時代」軽部池西遺跡『青海波』第3号　泉州の自然と文化財を守る連絡会議

河合古墳　83

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　河合古墳」『岸和田市史』第1巻

河合城跡　105

1985　玉谷　哲「河合城跡」『日本城郭大系』12　大阪・兵庫　新人物往来社

神ノ木山遺跡　116

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　神木山遺跡」『岸和田市史』第1巻

上松遺跡　135

1973　松井忠春「上松遺跡」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告』　㈶元興寺仏教民俗資料研究所

上松台墓地　132

1973　松井忠春「上松台墓地」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告』　㈶元興寺仏教民俗資料研究所

1973　松井忠春「三昧遺跡」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告』　㈶元興寺仏教民俗資料研究所

上松中尾遺跡　157

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　上松中尾遺跡」『岸和田市史』第1巻

岸和田古城跡　89

1985　玉谷　哲「岸和田古城跡」『日本城郭大系』12　大阪・兵庫　新人物往来社

岸和田城跡　114

1981　岸和田市教育委員会『岸和田の文化財　写真集（市内出土瓦）V』

1985　玉谷　哲「岸和田城跡」『日本城郭大系』12　大阪・兵庫　新人物往来社

1986　直木孝次郎・森　杉夫編「岸和田城跡」『大阪府の地名・日本歴史地名大系28』　平凡社

狐塚遺跡　23

1976　岸和田市史編纂委員会『市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料』『岸和田市史紀要』2

1978　大阪府史編集委員会「狐塚遺跡」『大阪府史』第1巻　P. P307～308

狐塚古墳　118

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　狐塚古墳（岡山狐塚古墳）」『岸和田市史』第1巻

狐塚古墳　22

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　下松狐塚古墳」『岸和田市史』第1巻

狐塚古墳　25

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　上松狐塚古墳」『岸和田市史』第1巻

経塚古墳　84

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　経塚古墳（光忍上人塚古墳）」『岸和田市史』第1巻

義犬塚古墳　75

1973　岡本一士「天神山古墳群　第1号墳　義犬塚古墳」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告』　財元興寺仏教民俗資料研究所

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　義犬塚古墳」『岸和田市史』第1巻

儀平山古墳　78

1978　大阪府史編集委員会「儀平山古墳」『大阪府史』第1巻　P917

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　儀平山古墳」『岸和田市史』第1巻

楠本神社古墳　97

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　楠本神社古墳」『岸和田市史』第1巻

久米田池内須恵器窯跡　39

1979　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　久米田池池底遺跡」『岸和田市史』第1巻

久米田寺跡　34

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1981　岸和田市教育委員会『岸和田の文化財　写真集（市内出土瓦）V』

1986　直木孝次郎・森　杉夫編「久米田寺跡」『大阪府の地名・日本歴史地名大系28』　平凡社

黒石遺跡　171

1985　大阪府教育委員会「付章　府道磯之上山直線予定地内分布調査の結果」『二田遺跡試掘調査概要——府道磯之上山直線建設工事に伴う試掘調査概要——』

具足遺跡　150

1973　松井忠春「具足遺跡」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告』　財元興寺仏教民俗資料研究所

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　具足遺跡」『岸和田市史』第1巻

行合堂跡　119

1973　岡本一士「行過堂」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告』　財元興寺仏教民俗資料研究所

神於おぐら谷遺跡　82

1899　考古学会「雑報　和泉国の銅鐸」『考古学会雑誌』第3篇第2号

1978　大阪府史編集委員会「神於銅鐸」『大阪府史』第1巻　P547

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　神於山銅鐸出土遺跡」『岸和田市史』第1巻

1986　直木孝次郎・森　杉夫編「神於おぐら谷遺跡」『大阪府の地名・日本歴史地名大系28』　平凡社

1986　大阪府立泉北考古資料館「流水文銅鐸　岸和田市神於町出土」『大阪府の銅鐸図録』

神於寺跡　81

1973　木下密運「神於寺」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告書』　勧元興寺仏教民俗資料研究所

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1981　岸和田市教育委員会「神於寺跡」『岸和田の文化財　写真集（市内出土瓦）V』

1983　竹内理三編「神於寺」『大阪府地名大辞典・角川日本地名大辞典27　大阪府』　角川書店

1986　直木孝次郎・森　杉夫編「神於寺」『大阪府の地名・日本歴史地名大系28』　平凡社

光明塚古墳　32

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　光明塚・光明塚南古墳」『岸和田市史』第1巻

小金塚古墳　44

1978　大阪府史編集委員会「小金塚古墳」『大阪府史』第1巻　P917

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　小金塚古墳」『岸和田市史』第1巻

小寺遺跡　128

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　小寺遺跡」『岸和田市史』第1巻

琴山遺跡　58

1973　岡本一士「琴山遺跡」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告書』　勧元興寺仏教民俗資料研究所

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1978　大阪府史編集委員会「琴山遺跡」『大阪府史』第1巻　P181、307、308

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　琴山遺跡」『岸和田市史』第1巻

1980　岸和田市教育委員会「琴山遺跡」『岸和田の文化財　写真集（市内出土石器）VI』

小松里廃寺　16

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1978　大阪府史編集委員会「小松里廃寺」『大阪府史』第1巻　P917

1981　岸和田市教育委員会「小松里廃寺」『岸和田の文化財　写真集（市内出土瓦）V』

1983　岸和田市教育委員会『岸和田市文化財調査概要8・昭和57年度発掘調査概要』

1984　岸和田市教育委員会『岸和田市文化財調査概要9・昭和58年度発掘調査概要』

権現山古墳　7

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　樫現山古墳と無名の二墳」『岸和田市史』第1巻

三合塚古墳　62

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　三合塚古墳」『岸和田市史』第1巻

三本松下遺跡　59

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1978　大阪府史編集委員会「三本松下遺跡」『大阪府史』第1巻　P307

志阿弥法師塚古墳　27

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　志阿弥法師塚古墳」『岸和田市史』第1巻

重の原遺跡　49

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　重ノ原遺跡」『岸和田市史』第1巻

1981　岸和田市教育委員会「重の原遺跡」『岸和田の文化財　写真集（市内出土瓦）V』

重の原古墳　45

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　重ノ原古墳」『岸和田市史』第1巻

芝ノ垣外遺跡　174

1985　大阪府教育委員会「付章　府道磯之上山直線予定地内分布調査の結果」『三田遺跡試掘調査概要——府道磯之上山直線建設工事に伴う試掘調査概要——』

四方寺遺跡　151

1973　松井忠春「西方寺遺跡」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告書』　帥元興寺仏教民俗資料研究所

下池田遺跡　127

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　下池田遺跡」『岸和田市史』第1巻

1980　岸和田市教育委員会「下池田遺跡」『岸和田の文化財　写真集（市内出土土器）IV』

1980　岸和田市教育委員会「下池田遺跡」『岸和田の文化財　写真集（市内出土石器）VI』

1986　渡辺昌宏「泉州の縄文時代」下池田遺跡『青海波』第3号　泉州の自然と文化財を守る連絡会議

1986　直木孝次郎・森　杉夫編「下池田遺跡」『大阪府の地名・日本歴史地名大系28』　平凡社

浄行寺古墳　26

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　碁石山古墳」『岸和田市史』第1巻

女郎塚古墳　28

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　女郎塚古墳」『岸和田市史』第1巻

神明山古墳　60

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　神明山古墳」『岸和田市史』第1巻

大師淵遺跡　109

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　大師淵遺跡」『岸和田市史』第1巻

高山古墳　115

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　高山古墳」『岸和田市史』第1巻

田治米廃寺　37

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1981　岸和田市教育委員会「田治米廃寺」『岸和田の文化財　写真集（市内出土瓦）V』

田治米宮内遺跡　38

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1978　大阪府史編集委員会「田治米宮内遺跡」『大阪府史』第1巻　P543

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　田治米宮内遺跡」『岸和田市史』第1巻

ちご池東遺跡　52

1973　岡本一士「ちご池東遺跡」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告書』　財元興寺仏教民俗資料研究所

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1978　大阪府史編集委員会「児子池東遺跡」『大阪府史』第1巻　P525

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　児子池東遺跡」『岸和田市史』第1巻

壺山遺跡　139

1973　岡本一士「壺山遺跡」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告書』　財元興寺仏教民俗資料研究所

1982　岸和田市教育委員会『土生遺跡他発掘調査概要・岸和田市文化財調査概要7』

天神山古墳　69

1973　岡本一士「天神山古墳群　第3号墳　天神山古墳」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告書』　財元興寺仏教民俗資料研究所

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　天神山古墳」『岸和田市史』第1巻

1981　岸和田市教育委員会『土生遺跡他発掘調査概要・岸和田市文化財調査概要6』

天神山廃寺　68

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1981　岸和田市教育委員会「天神山廃寺」『岸和田の文化財　写真集（市内出土瓦）V』

1982　岸和田市教育委員会『土生遺跡他発掘調査概要・岸和田市文化財調査概要7』

転法輪寺跡　112

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1981　岸和田市教育委員会「転法輪寺跡」『岸和田の文化財　写真集（市内出土瓦）V』

トビガ谷遺跡　143

1973　岡本一士「トビガ谷遺跡」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告書』　財元興寺仏教民俗

資料研究所

土居城跡　102

1985　玉谷　哲「土居城」『日本城郭大系』12　大阪・兵庫　新人物往来社

土井ノ木遺跡　176

1985　大阪府教育委員会「付章　府道磯之上山直線予定地内分布調査の結果」『三田遺跡試掘調査概要——府道磯之上山直線建設工事に伴う試掘調査概要——』

堂浦廃寺　67

1973　岡本一士「堂浦廃寺跡」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告書　㈶元興寺仏教民俗資料研究所

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1981　岸和田市教育委員会「堂浦廃寺」『岸和田の文化財　写真集（市内出土瓦）V』

1982　岸和田市教育委員会『土生遺跡他発掘調査概要・岸和田市文化財調査概要7』

堂ケ峯廃寺　103

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1981　岸和田市教育委員会「堂ケ峰廃寺」『岸和田の文化財　写真集（市内出土瓦）V』

堂ノ後廃寺　61

1973　岡本一士「堂ノ後廃寺」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告書』　㈶元興寺仏教民俗資料研究所

どぞく遺跡　51

1973　松井忠春「どぞく遺跡」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告書』　㈶元興寺仏教民俗資料研究所

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1978　大阪府史編集委員会「どぞく遺跡」『大阪府史』第1巻　P547

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　どぞく遺跡」『岸和田市史』第1巻

中之社遺跡　177

1985　大阪府教育委員会「付章　府道磯之上山直線予定地内分布調査の結果」『三田遺跡試掘調査概要——府道磯之上山直線建設工事に伴う試掘調査概要——』

長坂古墳　15

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　長坂古墳」『岸和田市史』第1巻

流木土田山遺跡　71

1962　玉谷　哲「大阪府岸和田市流木町発見の銅鐸」『古代文化』9—2　㈶古代学協会

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1978　大阪府史編集委員会「流木銅鐸」『大阪府史』第1巻　P547

1978　森　浩一「岸和田市流木町出土の銅鐸」『古代学研究』68　古代学研究会

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　流木銅鐸出土遺跡」『岸和田市史』第1巻

1986　直木孝次郎・森　杉夫編「流木土田山遺跡」『大阪府の地名・日本歴史地名大系28』　平凡社

1986　大阪府立泉北考古資料館「岸和田市流木町出土銅鐸」『大阪府の銅鐸図録』

西大路遺跡　160

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1985　大阪府教育委員会「付章　府道磯之上山直線予定地内分布調査の結果」『三田遺跡試掘調査概要——府道磯之上山直線建設工事に伴う試掘調査概要——』

1985　㈶大阪府埋蔵文化財協会『西大路遺跡・今木廃寺遺跡　発掘調査事業報告書』

1986　㈶大阪府埋蔵文化財協会「西大路遺跡・今木遺跡」『泉州の遺跡——㈶大阪府埋蔵文化財協会昭和60年度発掘調査成果展——』

沼天神社遺跡　126

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　沼天神社遺跡」『岸和田市史』第1巻

1981　岸和田市教育委員会『沼天神社遺跡』『岸和田の文化財　写真集（市内出土瓦）V』

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

箱谷古墳　144

1973　松井忠春「箱谷古墳」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告書』　㈶元興寺仏教民俗資料研究所

畑町遺跡　63

1973　岡本一士「神須屋遺跡」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告書』　㈶元興寺仏教民俗資料研究所

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1978　大阪府史編集委員会「畑町遺跡」「上須屋町遺跡」『大阪府史』第1巻　P307、543

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　畑遺跡」『岸和田市史』第1巻

1981　岸和田市教育委員会「畑遺跡」『岸和田の文化財　写真集（市内出土土器）IV』

1981　岸和田市教育委員会「畑遺跡」『岸和田の文化財　写真集（市内出土石器）VI』

1981　岸和田市教育委員会『土生遺跡他発掘調査概要・岸和田市文化財調査概要6』

1981　岸和田市教育委員会「畑遺跡」『岸和田の文化財　写真集（市内出土瓦）V』

1983　岸和田市教育委員会『岸和田市文化財調査概要8・昭和57年度発掘調査概要』

土生遺跡　131

1975　岸和田遺跡調査会『土生遺跡　第2次発掘調査概要』

1975　岸和田遺跡調査会『土生遺跡　第3次発掘調査概要』

1976　岸和田市教育委員会『土生遺跡発掘調査概要・岸和田市文化財調査概要1』

1977　岸和田市教育委員会『土生遺跡発掘調査概要・岸和田市文化財調査概要2』

1978　岸和田市教育委員会『土生遺跡発掘調査概要・岸和田市文化財調査概要3』

1978　大阪府史編集委員会「土生遺跡」『大阪府史』第1巻　P526、544、791

1979　岸和田市教育委員会『土生遺跡発掘調査概要・岸和田市文化財調査概要4』

1979　巽淳一郎「1978年考古学界の動向　古墳時代」『考古学ジャーナル』165ニューサイエンス社

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　土生遺跡」『岸和田市史』第1巻

1981　岸和田市教育委員会『土生遺跡発掘調査概要・岸和田市文化財調査概要6』

1982　岸和田市教育委員会『土生遺跡発掘調査概要・岸和田市文化財調査概要7』

1986　直木孝次郎・森　杉夫編「土生遺跡」『大阪府の地名・日本歴史地名大系28』　平凡社

春木天の川遺跡　1

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1978　大阪府史編集委員会「春木天の川遺跡」『大阪府史』第1巻P543

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　春木天の川遺跡」『岸和田市史』第1巻

春木廃寺　3

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1978　大阪府史編集委員会「春木廃寺」『大阪府史』第1巻　P917

1981　岸和田市教育委員会「春木廃寺」『岸和田の文化財　写真集（市内出土瓦）V』

1985　堺市博物館「和泉地方における瓦の系譜（試案）」『春期特別展　堺の遺跡と出土品』

春木八幡山遺跡　2

1965　堅田　直他『岸和田市春木八幡山遺跡の研究』　岸和田市教育委員会・師古代学協会

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1978　大阪府史編集委員会「春木八幡山砂丘遺跡」『大阪府史』第1巻

1978　大阪府史編集委員会「春木八幡山遺跡」『大阪府史』第1巻　P244、315、317、543

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　春木八幡山遺跡」『岸和田市史』第1巻

1981　岸和田市教育委員会「春木八幡山遺跡」『岸和田の文化財　写真集（市内出土土器）IV』

1983　竹内理三編「春木八幡山遺跡」『大阪府地名大辞典・角川日本地名大辞典』　角川書店

1986　渡辺昌宏「泉州の縄文時代」春木八幡山遺跡『青海波』第3号　泉州の自然と文化財を守る連絡会議

1986　直木孝次郎・森　杉夫編「春木八幡山遺跡」『大阪府の地名・日本歴史地名大系28』　平凡社

東山古墳　55

1973　松井忠春「東山古墳」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告書』　㈶元興寺仏教民俗資料研究所

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1978　大阪府史編集委員会「三田東山古墳」『大阪府史』第1巻　P917

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　東山古墳」『岸和田市史』第1巻

福田城跡　100

1985　玉谷　哲「福田城跡」『日本城郭大系』12　大阪・兵庫　新人物往来社

福塚古墳　72

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　福塚古墳」『岸和田市史』第1巻

二俣池北遺跡　169

1985　大阪府教育委員会「付章　府道磯之上山直線予定地内分布調査の結果」『三田遺跡試掘調査概要——府道磯之上山直線建設工事に伴う試掘調査概要——』

仏谷尾遺跡　125

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1978　大阪府史編集委員会「仏谷尾遺跡」『大阪府史』第1巻　P307～308

武蓮廃寺　24

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

別所熊野町遺跡　21

1978　大阪府史編集委員会「別所町遺跡」『大阪府史』第1巻　P309、313

別所廃寺　20

1981　岸和田市教育委員会「別所廃寺」『岸和田の文化財　写真集（市内出土瓦）V』

馬子塚古墳　54

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　馬子塚古墳」『岸和田市史』第1巻

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1978　大阪府史編集委員会「馬子塚古墳」『大阪府史』第1巻　P596

1986　直木孝次郎・森　杉夫編「馬子塚古墳」『大阪府の地名・日本歴史地名大系28』　平凡社

松尾池尻埴輪窯跡　40

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　松尾池尻埴輪遺跡」『岸和田市史』第1巻

摩湯山古墳　53

1954　泉大津高校地歴部「摩湯山古墳とその遺跡」『和泉考古学』1

1960　森　浩一「大阪府岸和田市摩湯山古墳出土の古墳遺物」『古代学研究』26　古代学研究会

1978　大阪府史編集委員会「摩湯山古墳」『大阪府史』第1巻　P596

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　摩湯山古墳」『岸和田市史』第1巻

1983　竹内理三編「摩湯山古墳」『大阪府地名大辞典・角川日本地名大辞典27』

1986　直木孝次郎・森　杉夫編「摩湯山古墳」『大阪府の地名・日本歴史地名大系28』　平凡社

丸山古墳　14

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　丸山古墳」『岸和田市史』第1巻

水込遺跡　170

1985　大阪府教育委員会「付章　府道磯之上山直線予定地内分布調査の結果」『三田遺跡試掘調査概要——府道磯之上山直線建設工事に伴う試掘調査概要——』

三田遺跡　165

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1985　大阪府教育委員会「付章　府道磯之上山直線予定地内分布調査の結果」『三田遺跡試掘調査概要——府道磯之上山直線建設工事に伴う試掘調査概要——』

1986　㈶大阪府埋蔵文化財協会「三田遺跡―A地区― ―B地区―」『泉州の遺跡　㈶大阪府埋蔵文化財協会　昭和60年度発掘調査成果展――』

1986　渡辺昌宏　他「三田遺跡発掘調査」『大阪府下埋蔵文化財担当者研究会資料』第14回

三田古墳　56

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　三田古墳」『岸和田市史』第1巻

三田墓地　137

1973　松井忠春「三田墓地」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告書』　㈶元興寺仏教民俗資料研究所

道ノ池遺跡　95

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1978　大阪府史編集委員会「道ノ池遺跡」『大阪府史』第1巻　P543

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　道ノ池遺跡」『岸和田市史』第1巻

箕土路遺跡　12

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1978　大阪府史編集委員会「箕土路遺跡」『大阪府史』第1巻　P244。313、543

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　箕土路遺跡」『岸和田市史』第1巻

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　中井遺跡」『岸和田市史』第1巻

1985　大阪府教育委員会「付章　府道磯之上山直線予定地内分布調査の結果」『三田遺跡試掘調査概要――府道磯之上山直線建設工事に伴う試掘調査概要――』

1986　㈶大阪府埋蔵文化財協会「箕土路遺跡」『泉州の遺跡――㈶大阪府埋蔵文化財協会　昭和60年度発掘調査成果展――』

1986　渡辺昌宏「泉州の縄文時代」箕土路遺跡『青海波』第3号　泉州の自然と文化財を守る連絡会議

1986　直木孝次郎・森　杉夫編「箕土路遺跡」『大阪府の地名・日本歴史地名大系28』　平凡社

南ノ坊古墳　79

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　南ノ坊古墳」『岸和田市史』第1巻

宮の後遺跡　178

1985　大阪府教育委員会「付章　府道磯之上山直線予定地内分布調査の結果」『三田遺跡試掘調査概要――府道磯之上山直線建設工事に伴う試掘調査概要――』

宮本遺跡　19

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』2

1978　大阪府史編集委員会「宮本遺跡」『大阪府史』第1巻　P309。313

向井山古墳群　145

1979　岸和田市史編纂委員会「第5章　遺跡各説　向井山1～3号墳」『岸和田市史』第1巻

無名塚古墳　30

1979　岸和田市史編纂委員会「第５章　遺跡各説　無名塚古墳」『岸和田市史』第１巻

山直北遺跡　164

1985　大阪府教育委員会「付章　府道磯之上山直線予定地内分布調査の結果」『三田遺跡試掘調査概要――府道磯之上山直線建設工事に伴う試掘調査概要――』

山直神社遺跡　104

1973　松井忠春「山直神社境内長光廃寺跡」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告書』　帥元興寺仏教民俗資料研究所

山直中遺跡　172

1985　大阪府教育委員会「付章　府道磯之上山直線予定地内分布調査の結果」『三田遺跡試掘調査概要――府道磯之上山直線建設工事に伴う試掘調査概要――』

山直墓地　163

1973　松井忠春「山直墓地」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告書』　帥元興寺仏教民俗資料研究所

山ノ内遺跡　163

1985　大阪府教育委員会「付章　府道磯之上山直線予定地内分布調査の結果」『三田遺跡試掘調査概要――府道磯之上山直線建設工事に伴う試掘調査概要――』

槍ケ谷城跡　98

1973　岡本一士「槍ケ谷城跡」『泉南丘陵地区　遺跡に関する分布調査報告書』　帥元興寺仏教民俗資料研究所

1985　玉谷　哲「槍ケ谷城跡」『日本城郭大系』12　大阪・兵庫　新人物往来社

吉井一之坪遺跡　9

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』２

1978　大阪府史編集委員会「吉井一之坪遺跡」『大阪府史』第１巻　P809

1979　岸和田市史編纂委員会「第５章　遺跡各説　吉井一之坪遺跡」『岸和田市史』第１巻

来迎寺跡　87

1976　岸和田市史編纂委員会「市内出土遺物図録　玉谷　哲　所蔵資料」『岸和田市史紀要』２

1981　岸和田市教育委員会「来迎寺跡」『岸和田の文化財写真集（市内出土瓦）Ｖ』

礼拝塚古墳　5

1979　岸和田市史編纂委員会「第５章　遺跡各説　礼拝塚古墳」『岸和田市史』第１巻

III章　調 査 の 成 果

芝ノ垣外遺跡における発掘調査は今回が初めてであることから、予見的、目的的な調査は実施できず、包含層と遺構の状況、時期の把握を主目的とせざるを得なかった。

調査の結果、床土下には中世・近世の包含層が拡がっており、その下位には中世遺構が地山面上に遺存していることが判明した。さらに、調査区西端では旧河道、東端では奈良時代の遺構群を確認し、特に溝からは良好な資料となる一群の土器を検出することができた。以下、層序を含め今回の調査成果について記すが、調査区の状況からA地区～G地区の各地区ごとに記述する。

第1節　層　　序

本調査区における層序は、各地区を通して大別すると3層に分かつことができる。これを上位からⅠ層・Ⅱ層・Ⅲ層と呼称する。

Ⅰ層は現耕作土で、各地区に共通したものである。

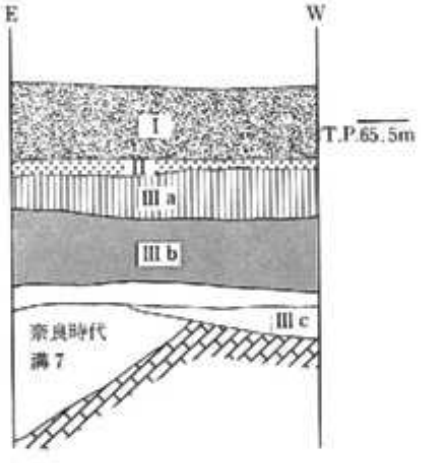
Ⅱ層は耕作土下の床土層で、鉄分の集積状態の差により、Ⅱa層とⅡb層に分ける。

Ⅲ層は床土以下地山面までの包含層を一括したが、層相としては2層ないし3層に分層すべきものである。しかし、各地区によってやや様相が異なり、混乱を避けるためにも包含層を総じてⅢ層とし、識別される層を上位からⅢa層・Ⅲb層・Ⅲc層とした。このうち、Ⅲa層とⅢb層は地区により色調はやや異なるが基本的に共通するものであり、Ⅲc層は地区ごとに異なった層である。

以下、各地区ごとの柱状図を示し、層序について説明する。

A地区（第7図）

Ⅰ層上面でT.P.65.6m、地山面レベルはT.P.約64.9mである。Ⅰ層、Ⅱ層下にⅢa層（5Y 8/4〔淡黄〕粗砂・砂礫混シルト）が堆積するが、とくに西半部に見られ、東端には存在しない。遺物

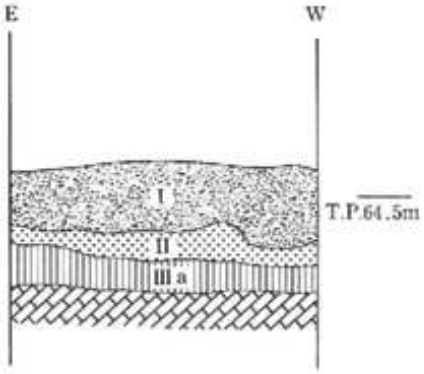


第7図　A地区の層序(1/20)

の包含密度は低い。Ⅲb層（5Y 6/1〔灰〕砂礫・礫混シルト）はA地区全面に堆積しており、遺物包含量は多い。Ⅲa層・Ⅲb層とも基本的に水平堆積を示す。Ⅲc層（10YR 5/8〔黄褐〕礫・砂礫混シルト、3cm大～20cm大の亜角礫含む）は西端部にのみ堆積している層で、わずかに遺物を含んでいる。Ⅲb層およびⅢc層下が地山であり、遺構面となっている。

B地区（第8図）

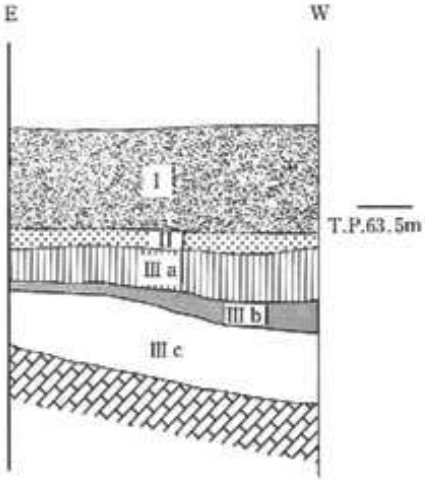
Ⅰ層上面のレベルはT.P.64.5m～64.7m、地山面レベルはT.P.64.1m～64.4mで、地山面は東に高く西に緩やかに傾斜する。Ⅰ・Ⅱ層下にⅢa層（10YR 4/4〔褐〕砂質土）が堆積する。Ⅲa層の平均層厚は約10cmであるが、西端は地山の傾斜に従い層厚も厚くなり、約20cmを測る。包含層であるが、遺物包含量は少ない。本地区ではⅢb層は存在せず、Ⅲa層直下が地山で、遺構面を形成している。



第8図　B地区の層序(1/20)

C地区（第9図）

C地区は8mほどの小地区で、Ⅰ層上面でT.P.63.7mを測る。地山面はB地区同様に西に向かって傾斜しているが、傾斜度はやや大きくなり、地山面レベルは東端でT.P.63.4m、西端でT.P.62.6mとなっている。Ⅰ層は層厚約30cmで均質に堆積しているが、Ⅱ層の床土は東端には存在せず、Ⅰ層下が地山となる。東側3分の1の地域を除く以西に、地山の傾斜に合わせてⅢa層～Ⅲc層が堆積している。Ⅲa層（2.5Y 6/2〔灰黄〕小円礫混砂泥土）、Ⅲb層（2.5Y 4/2〔暗灰黄〕小円礫混砂泥）は、上面はともに水平をなし、遺物を含む。Ⅲc層（10YR 4/1〔褐灰〕小円礫混砂質土）は西端で約40cmの厚さとなるが、D地区には存在していない。他の地区とは、やや異質な観を呈する。

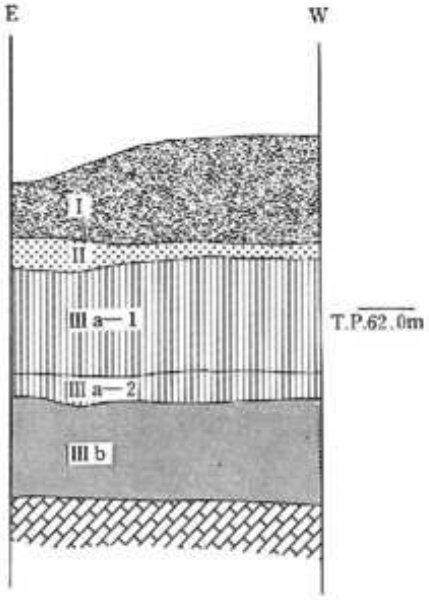


第9図　C地区の層序(1/20)

D地区（第10図）

Ⅰ層上面レベルはT.P.62.2m～62.4mで、地山

面レベルは東端でT.P.62.1m、西端でT.P.61.5mを測る。本地区では、わずかな色調の違いではあるが、Ⅲa層をⅢa—1層とⅢa—2層に分けることが可能である。東端はⅠ層下にⅢb層（2.5GY 5/1〔オリーブ灰〕粗砂・砂礫・細礫混粘質シルト）が堆積し、以下地山となっている。西に向かうに従い、順次Ⅱ層、Ⅲa—1層（10Y 7/1〔灰白〕砂礫・細礫混シルト）、Ⅲa—2層（10Y 8/1〔灰白〕粗砂・砂礫混シルト）が堆積する。Ⅲa—1層、Ⅲa—2層の分離は断面観察の結果であり調査中はⅢa層として包括して取扱った。Ⅲa層、Ⅲb層とも遺物包含は多い。



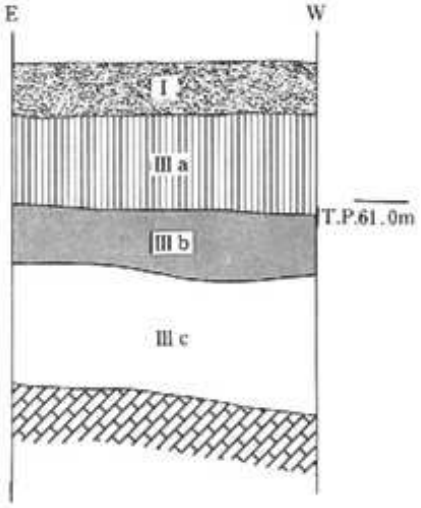
第10図　D地区の層序(1/20)

E・F地区（第11図）

E地区は、F地区の一部で一段高い部分にあたり、E・F地区を合わせて示す。

E地区はⅠ層上面レベルT.P.61.8m～61.9m、地山面レベルT.P.61.2mである。Ⅰ層下に明確なⅡ層はなく、Ⅲa層・Ⅲb層・地山となっている。

F地区はE地区で検出した地山面をさらに掘り下げて一段低くしたもので、同様にⅡ層は存在せず、Ⅲa層・Ⅲb層が堆積している。E地区から連続する層ではない。さらにⅢb層下にⅢc層（10YR 6/4〔にぶい黄橙〕混砂粘質土）が堆積している。Ⅲa・Ⅲb・Ⅲc層とも包含層で、F地区西半部分のⅢb層上面は、東半地山面で検出した遺構面に連なる面が存在している。

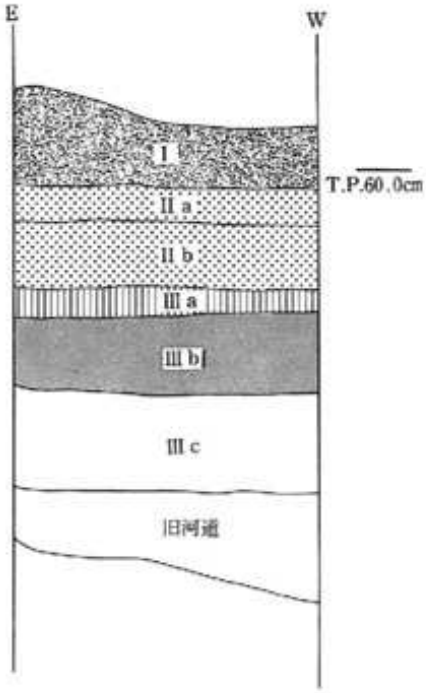


第11図　F地区の層序(1/20)

G地区（第12図）

G地区は、グリッドによる試掘の時点では、耕作土下1mでも地山面を検出できなかった地点である。耕作土上面レベルはT.P.59.6m～59.7mで、F地区とG地区間の段差が約2mとなり、各地区間では最もレベル差が認められる。調査を進め

た結果、Ⅰ層・Ⅱa層・Ⅱb層(10YR 7/8〔黄橙〕粗砂混粘質シルト)・Ⅲa層(10YR 7/1〔灰白〕粗砂・砂礫混シルト)・Ⅲb層(2.5Y 6/3〔にぶい黄〕砂礫・礫混シルト)・Ⅲc層(2.5Y 6/1〔黄灰〕粗砂・砂礫混粘質シルト)と堆積しており、さらに下層に礫層、砂層が堆積していることが判明した。礫層は東端ではⅢc層下に露呈し、西側に向かって下がっている。従って、これら砂層・礫層は旧河道内の河川堆積によるものと判断し、掘削深度が深くなることが予想されたため、G地区中央にトレンチを設定し、その部分を掘下げた。その結果、やはり山直谷中央に向かって傾斜する、旧河道の東肩であることが明らかになった。河川堆積の状況については、後項に記載する。

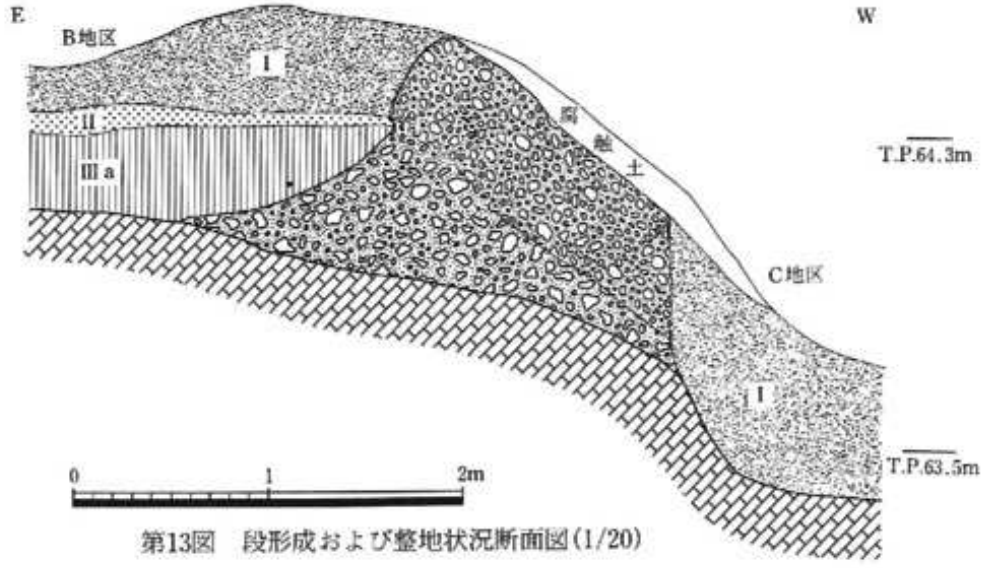


第12図　G地区の層序(1/20)

包含層の形成と時期

前項で各地区の層序の大略を示した。地山としたものは段丘堆積層であり、各地区すべてが同一の層相を示さないが、とりあえず地山面のレベルを見ると、A地区東端でT.P.65.2m、F地区西端ではT.P.60.2mとなっており、比高差5mを測る。両地点間の距離が170mであるから、約3度の傾斜をもって西に下っている。G地区は、約2mの段差、河道の検出からして段丘崖に相当するものと判断できる。この段丘面および段丘崖を利用して段々畑を造っているわけであるが、この段の形成方法を知る知見がB地区とC地区の境で得られた。(第13図、図版十一)B地区西端の地山面上に拳大～人頭大の礫を土と一緒に盛り、さらに上部に、やや小さい礫を含んだ土を盛って高さ約60cmの土堤を構築し、Ⅲa層を整地して耕作面を形成している。この構造は各段に見られ、少なくともⅢa層は整地土層であることがわかる。当地域における農業経営が、一時に開始もしくは整備されたことを示すものであろう。Ⅲb層については、良好な包含層であり、完形もしくは完形に近い土器も含まれることから自然堆積層と判断できる。

各包含層から検出した遺物については別に説明するが、各層の時期を示すと、Ⅲa層は近世、Ⅲb層は中世(12C～15C)、A地区Ⅲc層は奈良時代、C地区Ⅲc層は奈良時代、F地区Ⅲc層は中世、G地区Ⅲc層は中世(12C～13C)をそれぞれ主体としている。



第13図　段形成および整地状況断面図(1/20)

第2節　遺構と遺物

本調査区ではF地区に2枚の遺構面が存在するほかは、地山面上が遺構面となっている。遺構には、奈良時代と中世・近世のものがある。

A地区（第14図、図版三）

A地区では、大小合わせて8本・7条の溝、43基のピット群を検出したが、大半が柱穴とは考えられないものであった。遺構は特に調査区西半分で集中的に検出した。

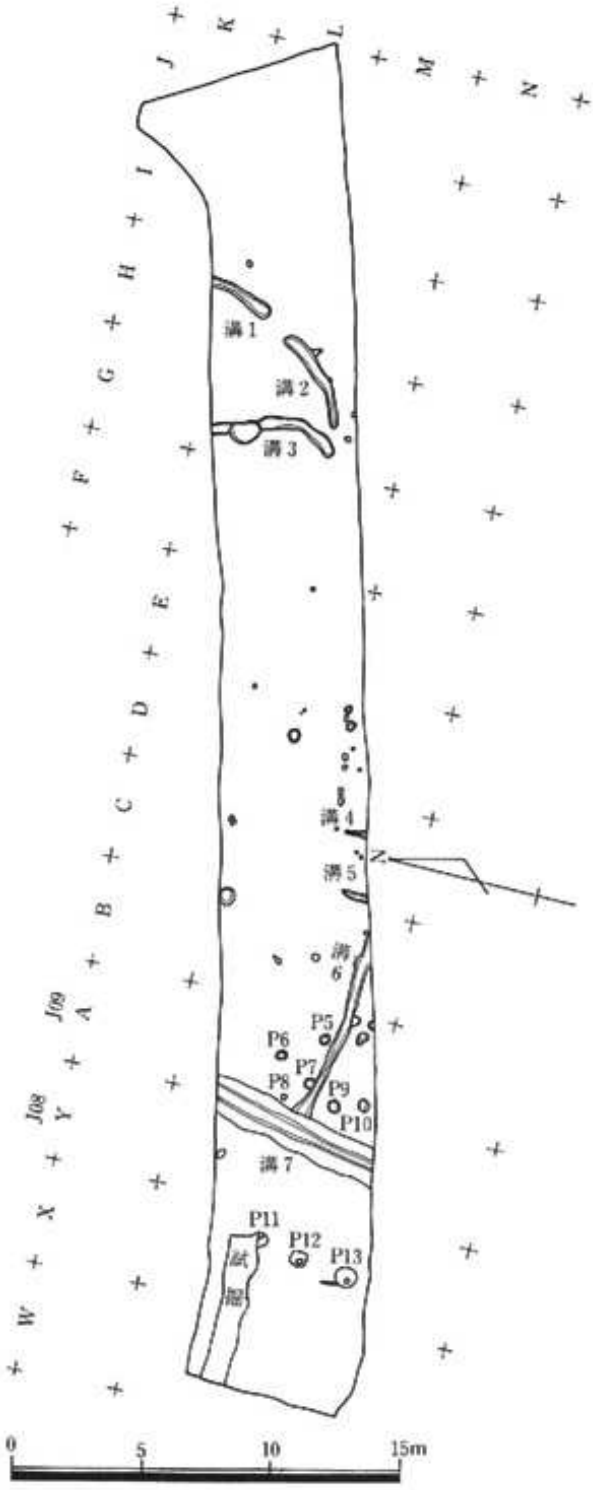
溝

溝1・溝2・溝3

溝1・溝2・溝3は、A地区東端付近で検出した。うち、溝1・溝2は、一連のものと考えられる。溝の規模は、いずれも幅40cm程度、深さ約4cmで、埋土は5YR 4/4(にぶい赤褐）混礫粘質シルトである。溝内から遺物は出土していない。

溝4・溝5

溝4・溝5はともに走行方向をほぼ北にとる溝で、幅は前者が約25cm、後者が約15cm、深さはともに3cm程度と非常に浅い。埋土は溝4が2.5Y 6/8(明黄褐)混礫粘質シルト、溝5が



第14図　A地区遺構配置図(1/300)

10YR 5/8（黄褐）粘質シルトで、溝4から土器片が出土している。

溝6（第16図）

溝6は、幅36cm程度の小規模な溝で、深さは東端で約4cm、溝7付近で約10cmを測り、溝7に注ぎ込むものである。埋土は2.5Y 5/6（黄褐）混礫シルトで、須恵器・土師器が数個体出土しているが、その大半は溝7付近に集中していた。

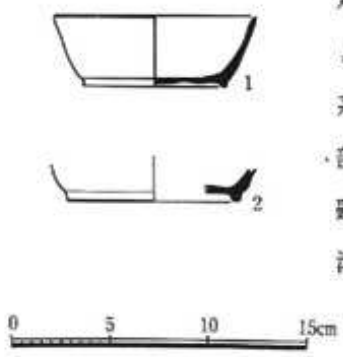
遺物（第15図、図版六）

溝6出土の土器で図化できたのは、次の2点である。いずれも須恵器の杯である。(1)は口径10.3cm、器高3.6cmの小型杯である。内外面とも回転ナデ調整であるが、底部外面はヘラ切り未調整である。焼成は悪く、灰白色を呈する。高台径は7cm、高さ0.3cmを測る。(2)は底部付近の破片である。復元高台径は8.2cm、高さ0.4cm。焼成は悪く、灰白色を呈する。

溝7（第16・17図、図版四・五）

溝7はA地区西端付近で調査区を横断するかたちで検出した。

走行方位はN—15°—Eである。この溝は遺構面下約60cmのところで段をもち、大きく上・下層に分かれる。上層は褐色系の土層で、下層は灰白色の還元層である。また、特に上層部分には礫を多く含む。溝の最終堆積と考えられる層には、礫とともに多量の須恵器・土師器が投棄されていた。土器は溝内で特に北半分に集中している。幅約1.4m、深さ約1.1m。



第15図　溝6検出遺物(1/4)

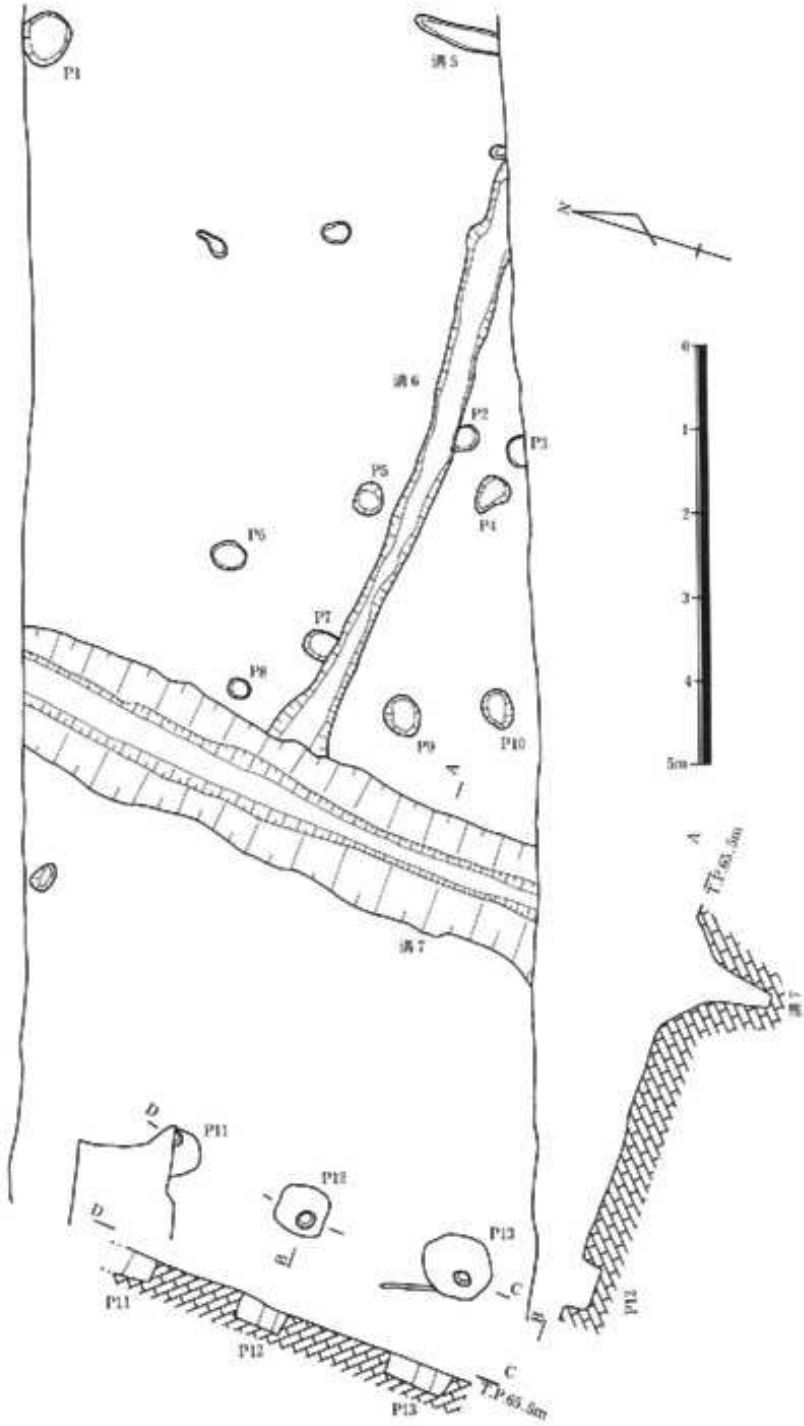
遺物（第18～20図、図版六～十）

溝7からは、多量の奈良時代土器が出土した。以下、須恵器・土師器の順に記述する。

須恵器には、平底で斜上方に体部が立ち上がる杯（杯A）と同形態で高台が付加する杯（杯B）、つまみを有する蓋、平底で体部がわずかに立ち上がる皿、高台を有する壺、鉢、甕がある。

（3・4）は杯Aである。（3）は口径13.5cm、器高33cm。凹凸をもつ底部から、若干内彎気味に立ち上がる体部をもつ。内外面とも回転ナデ調整である。焼成状態がよくないため、口縁部・底部内外面が緑灰色を、体部内外面が橙色を呈する。胎土は1mm程度の長石粒を含む。4は偏平な底部からほぼ直線的に立ち上がる体部をもつ。内外面の調整は不明である。色調は灰白色を呈し、1mm程度の長石粒を含む。

（5～12）は杯Bである。いずれも体部および底部内面は回転ナデを施し、底部外面はヘラ切り未調整である。（5）は口径11cm、器高4.5cm。高台は接合部を明瞭に残す。高台径は7.4cm、高さ0.3cmで断面は方形である。色調は灰白色、焼成は良好。胎土には1mm程度の砂粒を含む。（6）は口縁欠損のため口径不明である。体部はほぼまっすぐに立ち上がるようである。高台は底部外端面につかず、やや内側にとりつく。高台径7.8cm、高さ0.4cm。灰白色を呈し、焼成は良好。胎土には細かい白色粒を含む。（7）は底部片である。高台の仕上げは雑で、高台中央がくぼみ、内端面が接地する。径7.2cm、高さ0.3cm。胎土は緻密で灰白色を呈し、焼成は良好である。（8）も底部の破片である。高台はやや扁平で、径8cm、高さ0.4cmを計る。胎土は全体的に緻密で、灰白色をなし、焼成は良好である。（9）も底部片である。全体的に摩耗が激しく、調整は不明である。高台は他に比べて細い。高台径9cm、高さ0.4cm、浅黄色を呈し、焼成は悪い。胎土は1mm程度の長石粒を含む。（10）は口径17.7cm、器高5.7cmで、高台部分は直径13.4cm、高さ0.5cm。高台の継ぎ目が観察できる。灰白色を呈し、胎土は緻密で、焼成は良好である。（11）は口径17.8cm、器高5.3cmを測り、高台

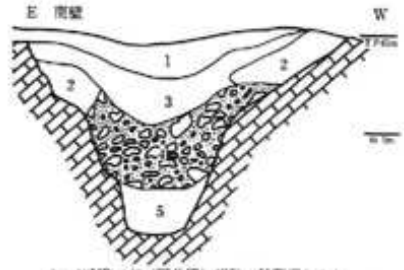


第16図　A地区奈良時代遺構配置図

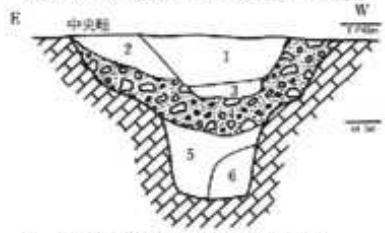
は径12cm、高さ0.5cmで断面方形を呈する。灰白色で、胎土は1～2mm程度の長石・石英粒を多量に含む。焼成は軟質である。(12)は体部が内彎気味に立ち上がる杯で、復元径15.3cm、器高4.3cm。高台は復元径10.6cm、高さ0.5cmで、断面方形を呈する。

皿は4個体出土した。(13)は口縁から底部にわたる破片である。復元径は19.7cm、器高1.8cmで、平坦な底部から斜上方に立ち上がり、口縁端部は外反する。回転ナデ仕上げで、底部には自然釉が付着する。焼成は良好で、灰白色を呈する。1mm以下の長石を含む。また、底部の破片であるが、縁辺部に火ダスキが観察できるものもある。焼成は良好。

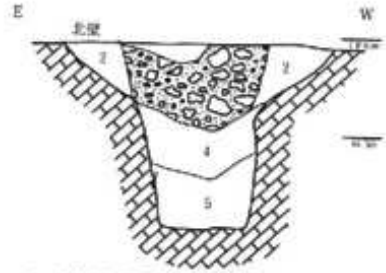
蓋は4個体図化できた。(14)は径20.5cm、高さ2.6cmを測り、径2.9cmの扁平な擬宝珠つまみをもつ。遺存状態不良のため、全体の調整は不明瞭であるが、天井部は回転ヘラケズリを施しているようである。天井部から口縁端部にかけては、Z字状の曲線をなす。淡黄色を呈し、2～3mm程度の長石・石英粒を含む。(15)は径21cm、高さ2.3cmで、(14)と同様扁平である。外面中央に径2.5cmの扁平な擬宝珠つまみをもち、天井部から口縁端部にかけて、Z字状の曲線をなす。全体に回転ナデ仕上げであるが、外面天井部端部から口縁端部付近まで回転ヘラケズリを施している。内面は回転ナデで、中央にはつまみをつけたときのものと思われる圧痕がある。焼成は良好で灰色を呈し、1～2mm程度の長石粒を含む。(16)は径15.3cm、高さ2.5cmと、やや小形の蓋で、外面中央には径2.5cmの扁平な擬宝珠つまみをもつ。天井部から口縁端部にかけては、Z字状の曲線をなす。焼成不



1. 10YR 4/2（灰黄褐）粗砂・砂礫混シルト
2. 10YR2/2（黒褐）粘質シルト〔細砂を多量に含〕
3. 10YR 5/2（灰黄褐）シルト～細砂質泥土〔砂礫・小礫を多量に含〕
4. 2.5Y 4/2（暗灰黄）細砂質泥土〔5cm～10cm大の亜角礫を含〕
5. 2.5Y 5/2（暗灰黄）砂礫・小礫混シルト質泥土



1. 10YR 4/2（灰黄褐）粗砂・砂礫混シルト
2. 10YR 2/2（黒褐）シルト〔細砂を多量に含〕
3. 2.5Y 5/4（黄褐）粗砂・砂礫混シルト
4. 10YR 4/1（褐灰）粘質シルト〔細礫・小礫を多量に含〕
5. 10YR 4/2（灰黄褐）粗砂・砂礫混シルト質泥土
6. 5Y 4/2（灰オリーブ）粘質シルト

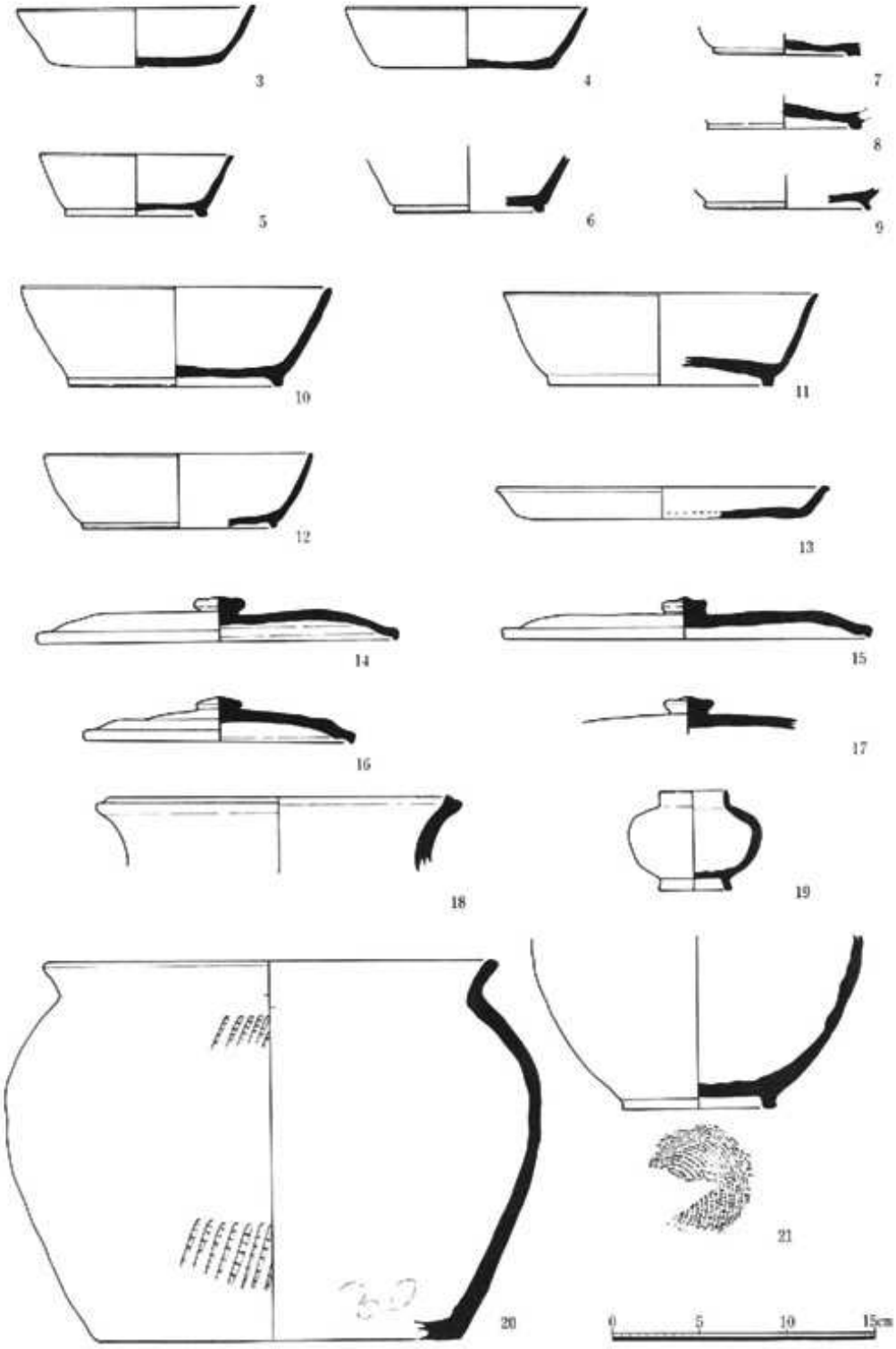


1. 10Y 5/1（灰）粗砂・小礫混シルト
2. 10YR 2/2（黒褐）粗砂・砂礫混シルト
3. 2.5Y 3/2（黒褐）粘質シルト〔10cm前後の亜角礫を多量に含〕
4. 10YR 3/2（黒褐）粗砂・細礫混粘質シルト～シルト質泥土
5. 10YR 5/2（灰黄褐）粗砂・砂礫粘質シルト

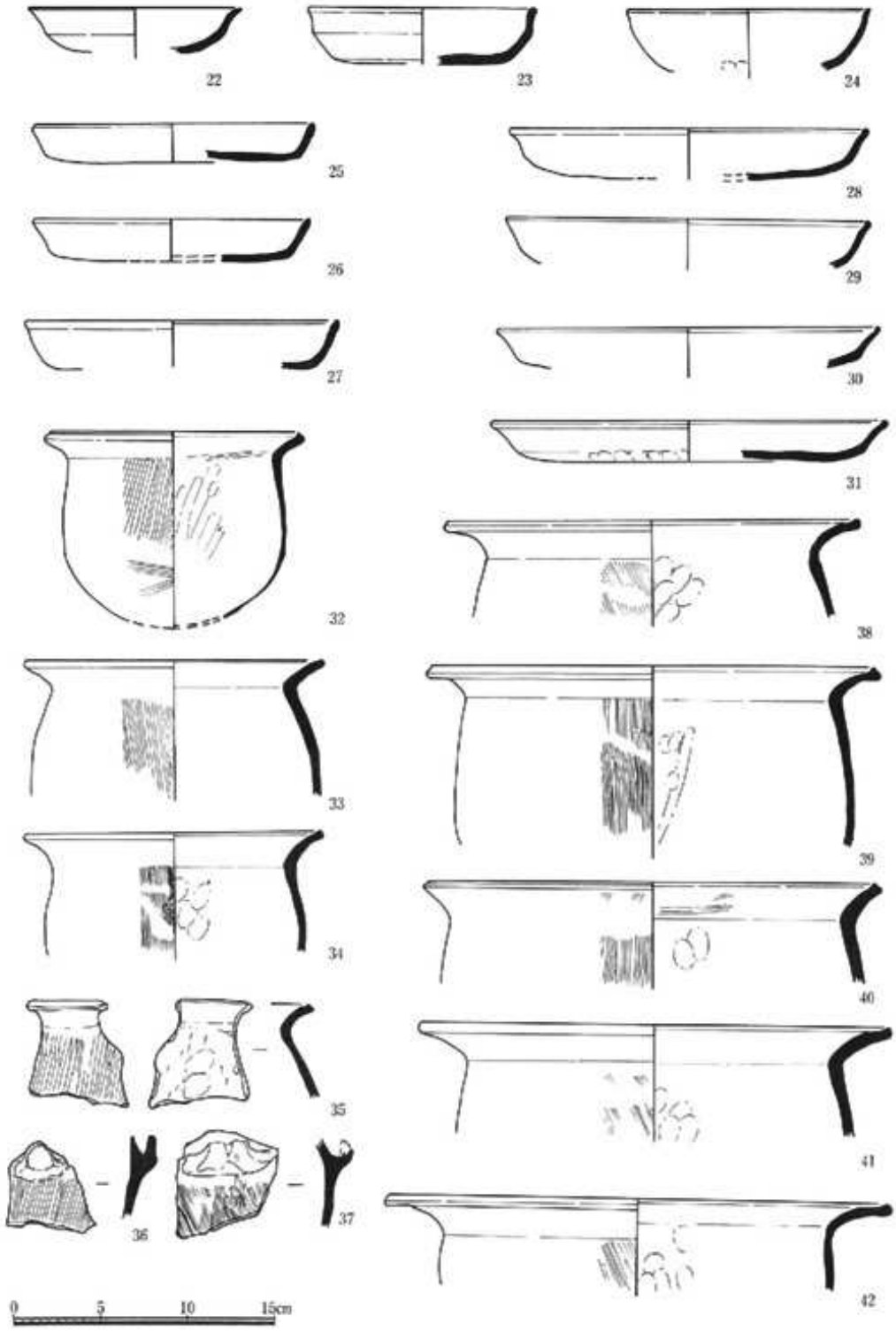
亜角礫と土器を包含する層

＊ 南壁および北壁は溝と斜交しているため、幅は実際より大きくなっている。
礫および土器を包含する層以下が遺物層となっている。

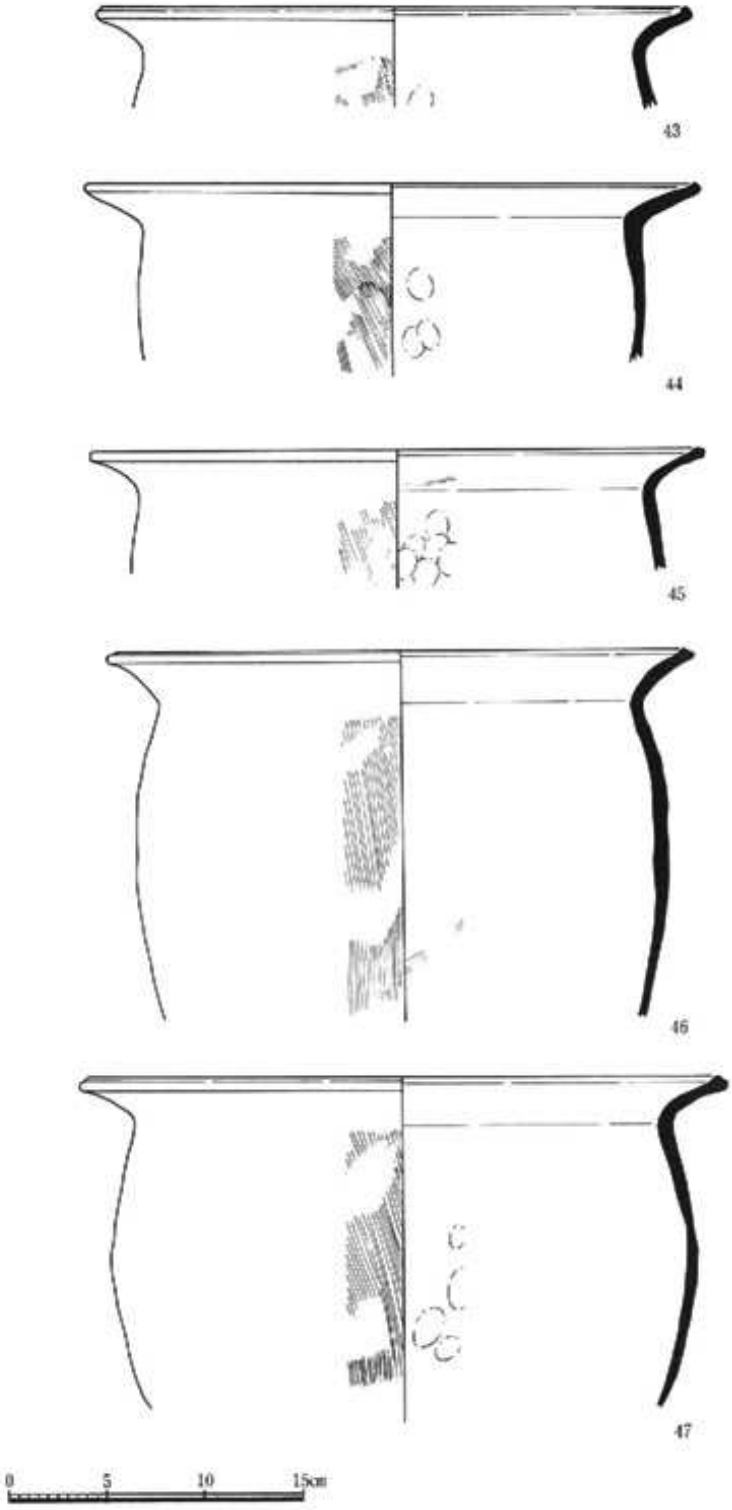
第17図　溝7断面図



第18図　溝７検出遺物Ⅰ・須恵器(1/4)



第19図　溝７検出遺物Ⅱ・土師器(1/4)



第20図　溝７検出遺物Ⅲ・土師器(1/4)

良のため全体にわたって調整は不明である。灰白色を呈し、2～3mm程度の長石・石英粒を含む。(17)は蓋天井部の破片である。扁平な擬宝珠つまみは、径2.8cmで、天井部は回転ヘラケズリののち回転ナデ仕上げをおこなっている。内面は不定方向のナデ仕上げである。焼成は良好で灰白色を呈し、胎土は緻密である。

(19)は台付短頸壺である。口縁部径3.8cm、器高5.7cm。扁平な底部から球形の体部を形成し、体部から頸部にかけては急にせばまり、短い頸部は直立し、口縁端部は丸い。

壺は大小1個体ずつ出土しているが、図示できたのは1個体のみである。(21)は大型壺の体部破片で、底部には静止糸切り痕がみられ、断面方形の高台がつく。高台径8.5cm、高さ0.7cmである。底部外面を除く内外面は回転ナデを施している。また内面底部には、頸部接合の際体部を削ったカスが付着している。底部の自然釉から、径5cm程度の細首がつくものと思われる。焼成は良好で、暗青灰白色を呈し、胎土は緻密である。

甕は3個体出土したが、図化できたのはうち1個体の口縁部のみである。(18)は口縁端部から頸部にかけての破片である。口縁径は19.4cmで、口縁端部内部を上方に拡張している。内外面ともナデ仕上げで、焼成は良好、灰白色を呈する。1～2mm程度の長石粒を含む。

(20)は鉢である。平坦な底部から体部が内彎気味に立ち上がり、頸部は「く」字状に屈曲して、口縁端部は丸い。口縁径25.5cm、器高21.6cmで全体的に器高に対して幅が広い。外面は擬格子叩きが部分的に残るが、回転ナデを施し仕上げている。内面は体部上半まで回転ナデを施すが、下半は不定方向のナデがみられ、底部付近では指ナデを施している。焼成は軟質で灰白色を呈し、1mm程度の長石粒を含む。

土師器は、杯、皿、及び大小の甕からなる。

(22～24)は杯である。(22)は復元径12.2cm、器高2.6cmで、体部下半は内彎気味に立ちあがるが、上半は外反し口縁にいたる。底部付近は未調整、その他はナデを施す。焼成は良好、橙色を呈し、細かい石英・長石粒を含む。(23)は復元径12.9cm、器高3.3cm。体部中位で段をもち、口縁はやや外反気味で端部は丸くおさめる。底部は未調整で、他はナデ仕上げである。焼成は良好で、2mm以下の長石・石英粒等を含む。(24)は内彎した体部をもつ杯で、復元径13.9cm、器高3.6cmである。全体にナデ仕上げであるが、外面底部付近は未調整である。焼成は良好で、浅黄橙色を呈し、褐色砂粒を含む。

(25～31)は皿である。皿類は、付着物や遺存状態の悪さで、内外面とも調整がわかりにくい。しかし、部分的に残っている器壁表面をみるかぎり、暗文が施されていた痕跡はな

く、ヘラミガキもみられない。いずれも焼成は良好で、橙色を呈する。

(25)は底部から口縁にかけての破片である。平底から外傾しつつ立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。復元径は16cm、器高は2.2cm。(26)は復元径16cm、器高2.5cmで、平底から体部はやや外彎気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。(27)は復元径18cm、器高2.8cm。体部は外傾しつつ立ち上がり、端部は巻込む。(28)は平底から外彎気味に外上方に立ち上がり、端部は巻込む。復元径は20.5cm、器高は2.9cm。(29)も(28)同様の器形をなす。復元径は20.8cm、器高2.7cmである。1mm程度の長石・石英粒を含む。(30)は復元径21.9cm、器高2.3cmで、体部はやや外彎しながら立ち上がり、口縁端部は巻込む。(31)は復元径22.8cm、器高2.4cmで、(30)と同様の形態であるが、口縁部外面に沈線が施されている。また、底部付近は指頭圧痕が残る。

(32～47)は甕である。大半が体部下半を欠く破片であるため、形態は不明である。また口縁端部を巻込むものが多く、体部内面にハケ目を施すものは少ない。

(32～34)は口径20cm以下の小型甕である。(32)は口径14.4cmの小型甕で、丸みのおびた底部からはやや内彎気味に立ち上がり、「く」字状に外反して口縁端部にいたる。体部外面上半は、縦方向の荒いハケ目が施され、下半は不規則に施される。頸部内面には、横ハケがみられる。体部内面にはケズリが部分的に施されている。(33)は口径17cmの小型甕で、体部外面は縦ハケ、内面はハケ目を施す。口縁端部の巻込みは顕著でない。(34)は口径16.8cmで体部下半を欠く小型甕である。体部外面には縦ハケ、内面はナデを施す。(35)は小型甕の口縁部破片である。外面は荒いハケが施され、内面には全体的にケズリが施されているが、ケズリの単位は不明。色調は他の甕がすべて橙色であるのに対し、灰褐色を呈する。2～3mm程度の長石・石英粒を含む。

(36)は把手付甕の把手部の破片である。褐色を呈し、外面には荒いハケ目を、内面はヘラケズリを施す。(37)も同様の破片である。細かいハケ目が不規則に施されている。内面は板ナデで、橙色を呈している。

(38～47)は口径20cm以上の大型甕で、いずれも、若干の差はあるが口縁部は大きく外反し、端部は巻込んでいる。また体部内面はほとんどケズリは施されていない。焼成は良好。(38)は頸部外面を削り、胴部との間に段をもうける。体部外面は指頭圧痕が顕著に残るのみである。復元径は23.6cm、2mm程度の長石・石英粒等を含む。(39)は口縁部内外面にナデ調整がなされ、体部外面には縦ハケが施される。内面は部分的にケズリがなされているが、むしろ指頭圧痕による凹凸が顕著である。口径25.5cm、胎土には2～3mm以下の長石・石英

粒が含まれている。(40)は他の甕に比べ口縁部が短い。口縁部内側には横ハケが施され、体部は指ナデが施されている。外面は体部に縦方向のハケ目が施されている。復元径は25.8cm、胎土は緻密。(41)は体部外面に雑な左上がりのハケ目が施される。内面はナデのみ。復元口径は27.1cm、細かい長石粒を含む。(42)は内面に指頭圧痕が残る。復元口径28.8cm、細かい長石粒を含む。(43)は復元口径29.8cmで、外面にはやや密なハケ目を残し、内面には指頭圧痕を残す。胎土には2～3mmの長石・石英粒等を多量に含む。(44)は頸部内面に横ハケを残す。復元口径は31.0cm、胎土は緻密である。(45)も(44)と同様の特徴をもつ。頸部内面に横ハケを残す。復元口径は30.6cm、細かい長石・石英粒等を多量に含む。(46)は、他の甕に比べて、口縁部外傾度がやや少ない。体部外面は縦ハケ、内部には部分的にハケ目調整やケズリが行われている。復元径は29.0cm、胎土は2mm以下の長石粒を含む。(47)は復元径32.2cmで、外面に左上がりのハケ目調整が施されている。内面には指頭圧痕が残る。胎土には2mm程度の長石粒を含む。

ピット

ピット群（第16図）

調査区中央付近には、径10cm～径50cm程度、深さ2～6cm程度の断面皿状をなすピット群が存在する。埋土はいずれも5Y 6/1（灰）混礫粘質シルトで、遺物は含まない。

P1

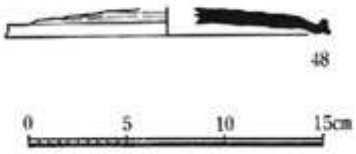
調査区中央部付近の北壁際でP1を検出した。これは、長径約62cm、短径約55cmの楕円形プランで、深さ約26cm、断面は鍋底状を呈する。埋土は5Y 6/1(灰)混礫粘質シルトで、遺物は含んでいない。

P2～P10

溝6をはさんで9個のピット群が存在する。

P2は溝6にその北端部を切られている。規模は径約31cm、深さ約2cmで、断面形は皿状を呈する。埋土は2.5Y 5/6（黄褐）混礫シルトで、遺物は含まれていない。

P3は、調査区南壁に接して検出された。径約38cmの円形で、深さは5.5cm程度で鍋底状を呈する。埋土は2.5Y 5/6（黄褐）混礫シルトで、遺物は含まれていなかった。



第21図　P7検出遺物(1/4)

P4は長径49cm、短径31cmの不整楕円形ピットで、断面は皿状をなし、埋土は2.5Y 5/6（黄褐）混礫シルトである。遺物は含まれていない。

P5は長径39cm、短径33cm、深さ40cmの楕円形ピットで、断面形は鍋底状を呈し、埋土は2.5Y 6/4（にぶい黄）混礫シルトである。遺物は含まれていない。

P6は長径45cm、短径33cmの楕円形ピットで、深さ約4cmである。埋土は2.5Y 5/6(黄褐)混礫シルトで、遺物は出土していない。

P7は溝6にその一部を切られている。径約36cm、深さ約9cmで、埋土は2.5Y 6/4（にぶい黄）混礫シルトで、須恵器が出土している。

P8は径約27cm、深さ9cmの円形プランをもち、埋土は2.5Y 6/4（にぶい黄）であった。遺物は含んでいない。

P9は長径45cm、短径41cm、深さ20cmの楕円形ピットで、断面形は鍋底状を呈する。埋土は2.5Y 5/6（黄褐）混礫シルトで、遺物は含んでいない。

P10は長径49cm、短径34cmの楕円形プランで、断面形は鍋底状を呈する深さ19cmのピットである。埋土は2.5Y 6/4（にぶい黄）混礫シルトで、土師器片が出土している。

P11～P13

P11、P12、P13は、溝7西側から検出された。P11は試掘トレンチのため北半分が破壊されているが、掘方は推定直径約55cmの円形で、ピット東壁際で径20cmの柱痕跡が検出された。深さ約36cmで、埋土は2.5Y 6/4（にぶい黄）混礫シルトであった。

P12は一辺約60cmの隅丸方形で中央部に径20cmの柱痕跡をもつ。埋土は10YR 3/2(黒褐)混礫シルトで深さ約26cmである。

P13は径約80cmの円形ピットで中央部に径約20cmの柱痕跡をもつ。埋土は5YR 4/4(にぶい赤褐)混礫シルトで深さ約28cmである。遺物は、P13の柱穴かや土師器小片が出土したにすぎない。

A地区内の遺構群を特色づけるものは、調査区西端付近で検出されたピット群及び溝である。溝7西側に存在するP11、P12、P13は、ほぼ一列にならび、主軸をN—13°—Eにもち、溝7にほぼ並行する。P11とP12、P12とP13の芯々間距離は、それぞれ1.8mと2.0

mである。今回の調査では、調査区の関係上2間分しか検出できなかった。しかし、このピット群の付近に同様のピットが存在しないことから、柵の可能性が高いと思われる。

溝6・溝7は、その埋土中の土器からみて奈良時代のものである。溝6は、そのレベル差からみても、排水溝として機能していたと考えられる。一方、溝7については、レベル差からは排水機能については不明であるが、還元されたシルトが下層にみられることから、水が溜まっていたことは確実である。これらのことから柵と溝7とは、外部との隔絶機能をもっていた可能性が高い。この溝内の土器の堆積状況から判断すると、この土器や礫を意識的に投棄し溝の機能をなくす意図があったと思われ、そのときに溝7より東側に存在した遺構群は廃絶したと思われる。また、溝6付近に集中しているピット群は、この溝と切り合っているものもあるが、その埋土中の土器からみて、ほぼ同時期のものであると考えられる。しかし、個別にみると、深さ・断面形にばらつきがみられ、各々の配置からみて掘立柱建物を想定することは困難である。

このような遺構群の在り方から判断すると、奈良時代遺構群は柵より東側に存在した可能性が極めて高い。また、A地区中央部から東側にまったく奈良時代遺構群が検出されなかったことについては、おそらく後世の削平を受けたためと思われる。

B地区（第22図、図版十一）

B地区では、平行する小溝を中心に、土壙、ピット等が検出された。

溝

溝は14本、11条を検出した。走向方位はN—5°—Wを示す。幅は最小で0.15m、最大で0.61mを測るが、平均0.2m～0.3mぐらいである。深度は2cm～8.5cmを測る。埋土色調は10YR 5/4（にぶい黄褐）、10YR 6/6（明黄褐）、10YR 5/6（黄褐）など微妙に異なるが、土質は混砂・混礫粘質土で、一定している。検出状況から判断しても、同時期に機能していたと考えられる。埋土中の遺物は、溝9、溝10、溝12から検出しており、瓦器、土師器、須恵器のいずれも細片である。

土壙1

平面規模4.44m×2.91m、深度最大0.13mを測る大型の浅い土壙である。埋土は、10YR 4/4（褐）砂質土で、分層はできない。瓦器、土師器の小片を含んでいる。

ピットは3基を検出したが、いずれも単独で組み合わさるものではなく、建物を想定することはできない。

溝はいわゆる素掘溝と呼ばれる耕作に関連したものと考えられ、B地区全体が耕作面であったことがうかがわれる。

C地区

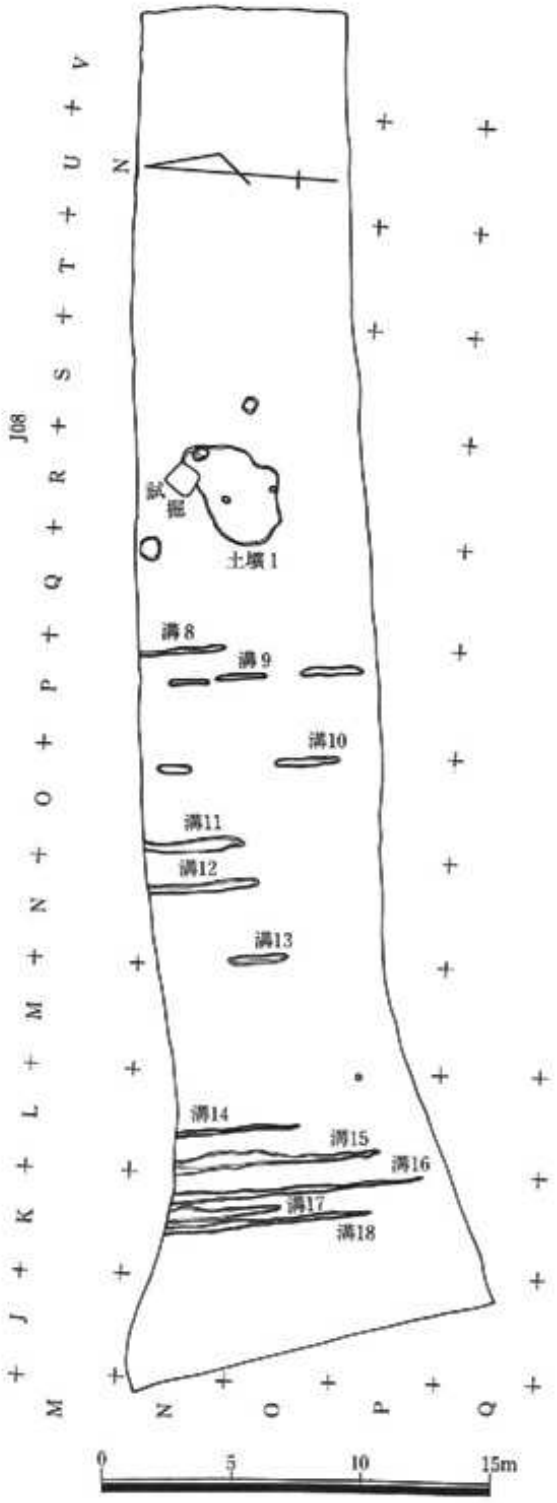
C地区はB地区より一段下がり、地山面も斜面となっている。遺構は全く検出できなかった。

D地区（第23図、図版十二）

D地区では、今回の調査の各地区のうち、最も多数の遺構を検出することができた。遺構には溝9条、土壙2基、柱穴81基等がある。柱穴としたものの半数は杭跡である。

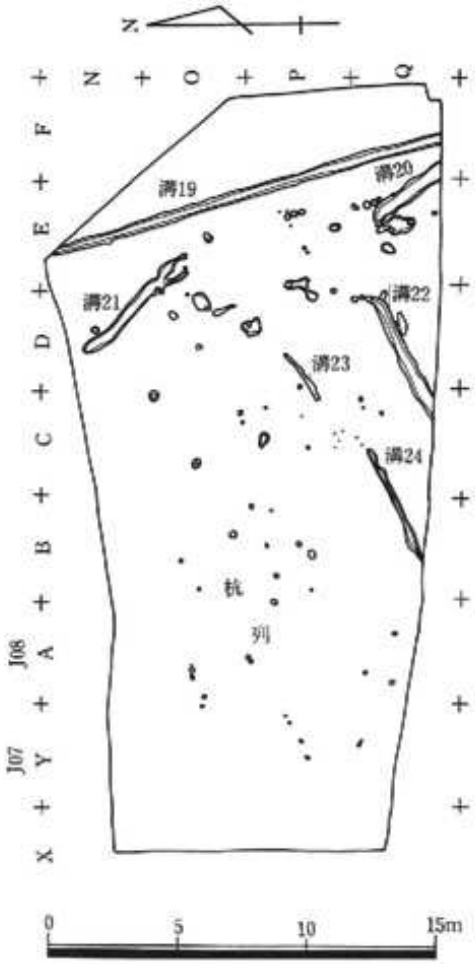
溝

溝は、D地区東半において検出した。溝19は他の遺構より層位的にやや高い面で検出している。内部に竹筒を入れた、いわゆる盲暗渠で、昭和になってか



第22図　B地区遺構配置図（1/300）

ら付設されたものである。溝20から溝24は、溝23と24が同一のものと判断でき、溝22と3mの間隔をおいてN—64°—Eの走向で平行に配置されている。これに対し溝20と21は、それぞれN—46°—W、N—38°—Wの走向を有し、溝22・24とはほぼ直交する配置となる。溝22が幅0.4m～0.6mで断面さら状を呈し、最大深度0.14m、埋土は5Y 5/1（灰）粗砂・砂礫・細礫混シルト。溝24が幅約0.4m、深度6.5cmで、壁は垂直に立ちあがる。埋土は7.5GY 7/1（明緑灰）粗砂・砂礫混シルト。



第23図　D地区遺構配置図(1/300)

ピット

柱穴状の遺構は多数検出された。そのうち、壁の状態、深度等から判断して明らかに柱穴と見做されるものも存在するが、建物を復原することはできない。それに対し杭跡は直線状にならぶものが多く、その方向も前記の溝に平行している。これらは杭列を復原することができよう。

遺構からの遺物の検出は少なく、図化できるものはない。遺物の種類には、須恵器、土師器、黒色土器、瓦器があり、須恵器は奈良時代、平安時代のものを含んでいる。

遺構面の性格を考えると、直交する溝、杭列から、耕作面と判断することができる。また、明確ではないが、遺構面上面での鉄分の集積、マンガンの発色状況を観察すると、溝・杭列と同方向の辺をもつ方形区画があるように思われる。この方向は、現況の周辺の地割方向とは異なっており、この地域で復原されている山直条里の方向にほぼ一致している。中世耕作面と判断して、間違いないものと考える。

E・F地区（第24図、図版十二・十三）

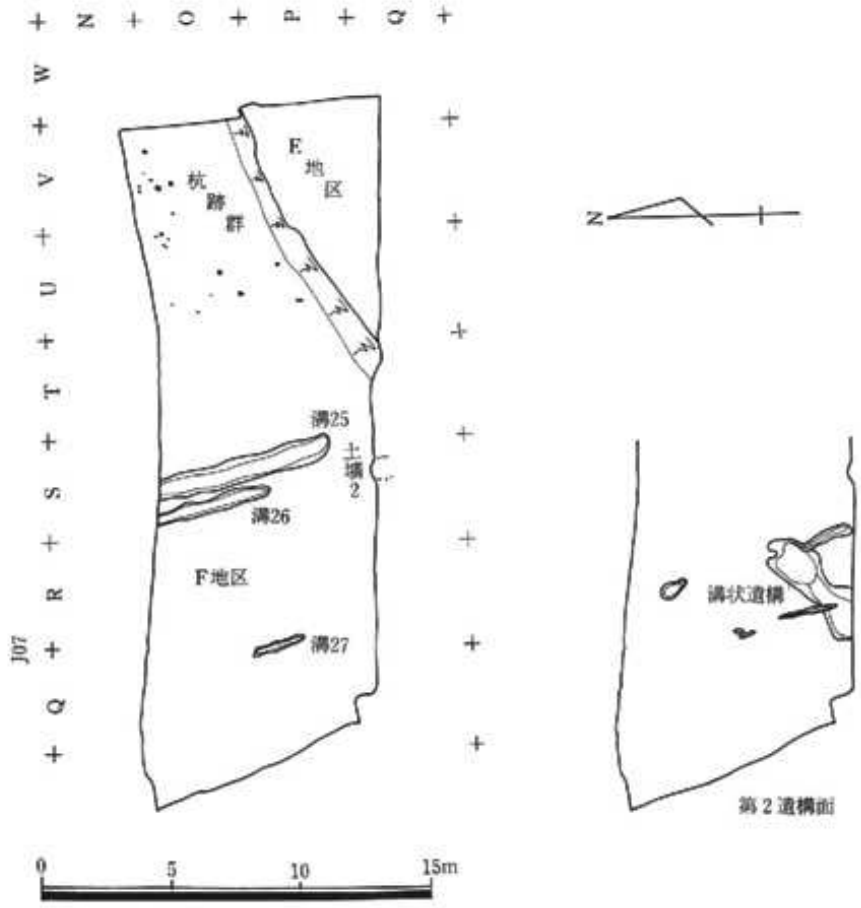
E・F地区では東側に1枚・西側にⅢc層を挟んで2枚の遺構面を確認した。第1遺構面は、少数の杭跡、溝、土壙からなり、第2遺構面は、溝、溝状遺構、ピットよりなる。

第1遺構面

溝

溝は3条を検出した。溝26は幅0.95m、深度0.21m、溝27は幅0.52m、深度0.21mを測る。近接して存在し、ともにN—14°—Eの走向を示している。両者とも調査区途中で削平され、消滅している。遺物は両溝とも、須恵器、土師器、瓦質土器の細片であるが、溝26からは丹波焼の破片を検出した。

溝27は、B地区と同様の素掘溝である。瓦器、須恵器の細片を検出している。



第24図　E・F地区遺構配置図(1/300)

土壙2

土壙2は、調査区南辺に一部を検出したのみで、全体の規模は不明である。検出部分は円形の一部であるような形状を呈し、断面形はスリバチ状である。埋土は、下層に砂礫が堆積し、上層に細砂や粘質シルトが堆積している。土師器細片を検出したのみである。

杭跡

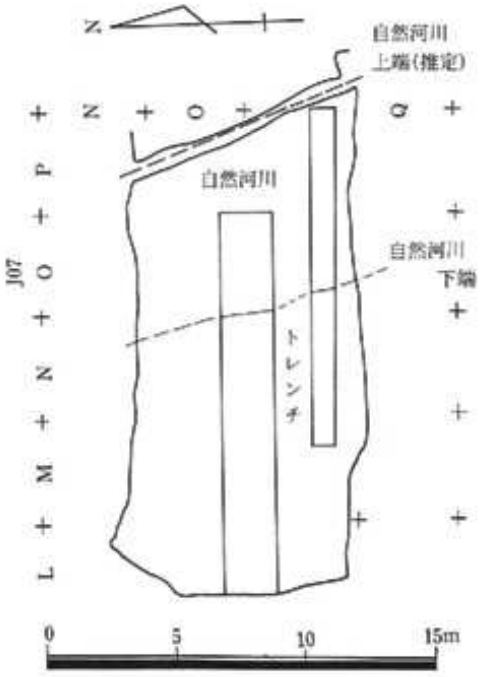
杭跡は、東端部に集中して検出した。いずれも垂直に打込んでおり、木片の遺存したものもある。埋土から見ても、比較的新しい杭跡である。

第2遺構面

素掘溝状の小溝や、溝状遺構とした不定形の大きな落込みがあるが、性格や、第1遺構面東半との関係など全く不明である。

遺物は、溝状遺構からサヌカイトの小剥片1点を検出したのみである。

G地区（第25～28図、図版十四・十五・十八）



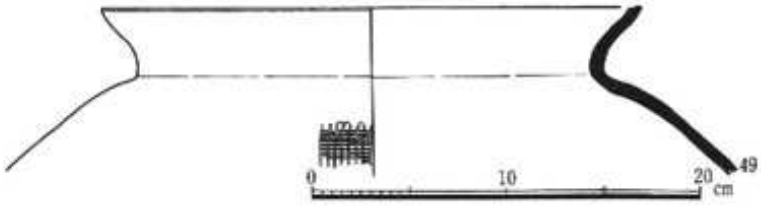
第25図　G地区遺構配置図(1/300)

G地区では、Ⅲc層下に旧河道を検出した。

本地区とF地区の境は、層序の項で述べたように段丘崖にあたると考えられ、旧河道は段の直下から存在する。

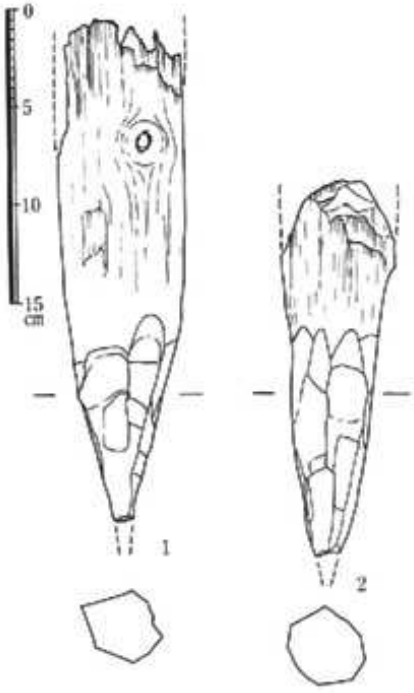
調査の都合で断面観察にとどまったが、その堆積状況を見ると、3度の急激な流れがあったことが推測できる。1度目は、本河道が形成された段階であり、2度目は、第28図4層の礫層が堆積した段階、3度目は1層の礫層が堆積し、河川が埋没した段階である。トレンチ掘削中、第28図5層の礫混シルトおよびそれに対応する層に先端を持つ杭を10本程検出している。これは、2度目の急激な流水に対処するための護岸施設と考えられる。

また、7層・8層と9層以下の層の境界も一時期の流れと考えられるが、このうち10層と13層から須恵器片をそれぞれ1点ずつ検出している。2点とも甕で、奈良時代に属すると考えられる。他の遺物としては、杭の打設された層位で、瓦器、土師器の細片を確認した。全体に遺物はほとんど含まないと言ってよい。



第26図　旧河道検出遺物(1/4)

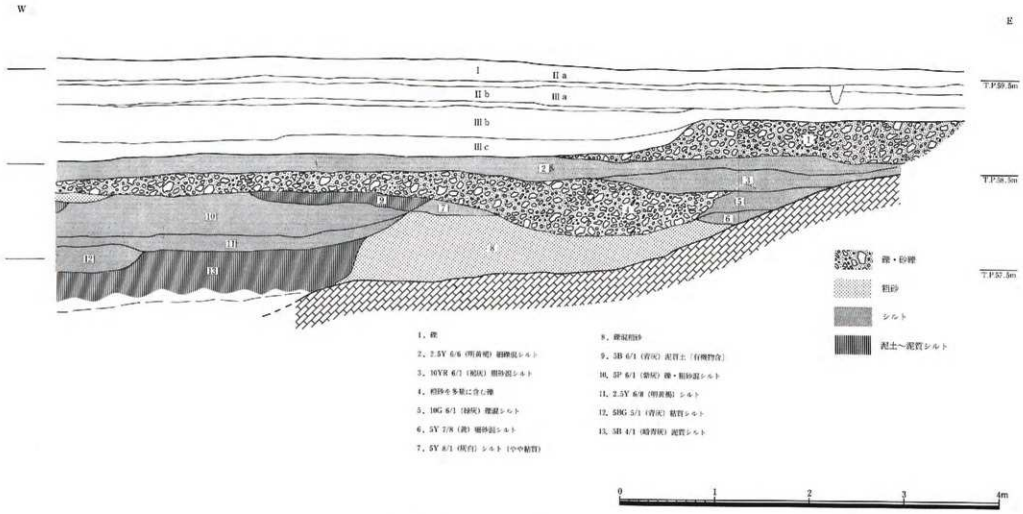
少数の遺物からではあるが、河川の時期を推測すると、奈良時代以降に流れていたことはあきらかであり、2度目の急激な流れを中世と考えることができよう。1層の礫層の堆積も、2・3層が細礫や粗砂を含むシルト層であること、Ⅲc層が12世紀から13世紀前半の遺物を包含することなどから、4層の礫層の時期と近い時期であったと推察できる。



第27図　旧河道肩部検出杭(1/4)

第26図は、13層で検出した須恵器甕の口縁部片である。復元口径27.8cmを測り、口縁端部は水平な凹面となっている。外面には擬格子状のタタキが残る。また、口縁部内面および外面には灰被り。色調N 6/0（灰）を呈する。

第27図は、河道の肩部から検出した護岸施設の杭である。全体の構造は、トレンチ調査のため判然としない。図に示したものが、平均的なものであり、特に大形のものは確認していない。杭には、枝払いしたものやしていないもの、樹皮を残したものなどがあり、統一はとれていない。材質も、針葉樹、広葉樹が認められる。いずれも杭先のみが遺存しており、上位は欠失している。(1)で杭径約6.6cm、残存長25.8cmを測り、ハツリ部分は長さ9cm～10.5cmほどである。



第28図　G地区旧河道断面図(部分)　(1/40)

第3節　包含層の遺物

包含層の層序および堆積状況については、すでに1節に述べた。耕作土(Ⅰ層)・床土(Ⅱ層)を除くと、本調査区には基本的にⅢa層・Ⅲb層という2層の包含層が認められ、部分的にⅢc層と総称する層が存在している。Ⅲc層が存在するのはA地区・C地区・F地区・G地区の4地区である。各包含層の遺物を示すと、

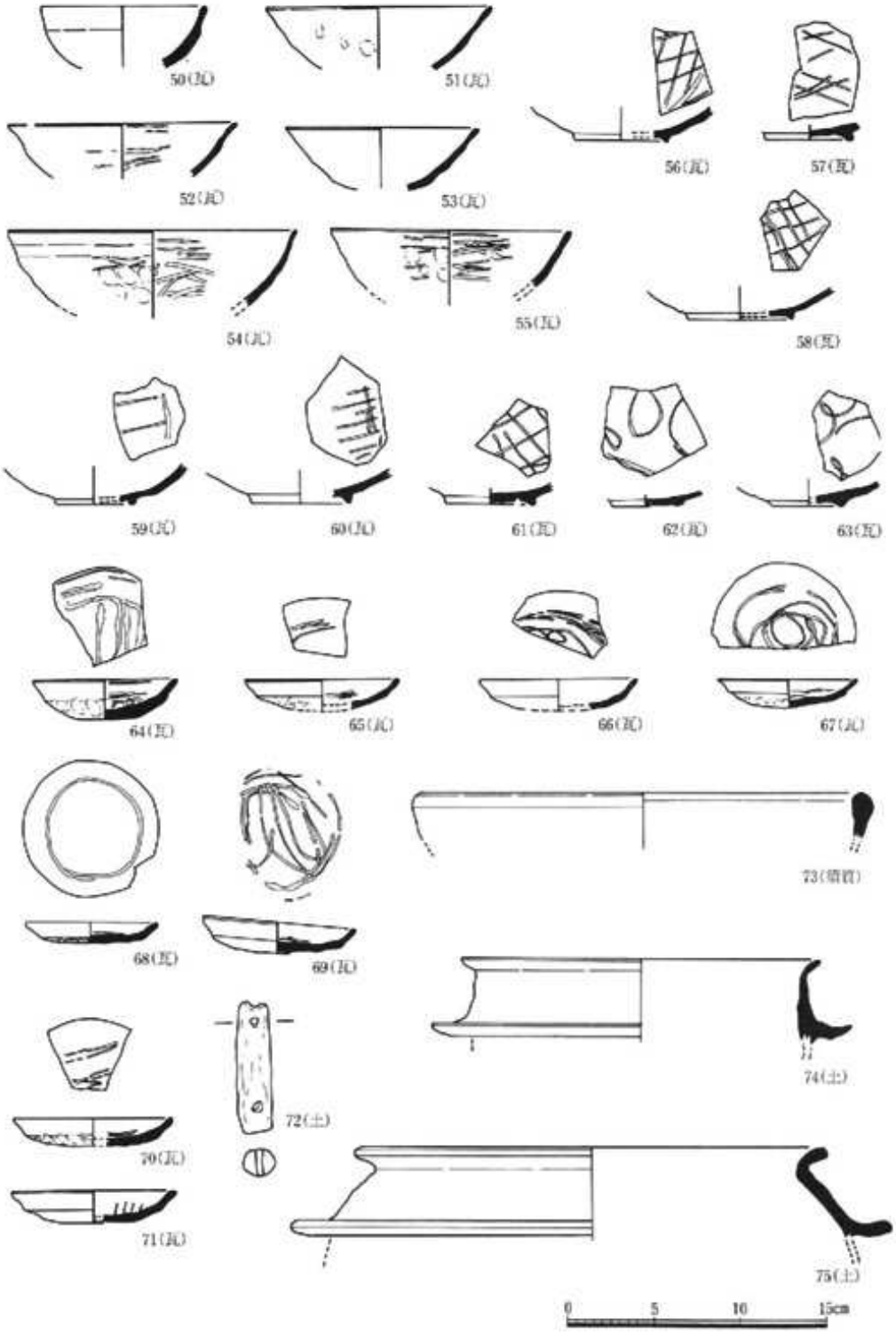
A地区Ⅲc層　検出状況では奈良時代遺構面直上に堆積し、奈良時代の遺物のみを含んでいる。しかし、遺構面が中世に削平を受けていることからすると、削平土が堆積したものと考えられる。遺物は須恵器・土師器の細片で、図化し得る資料はない。下位遺構面と同時期である。

C地区Ⅲc層　C地区の西端に堆積している。遺物には須恵器・土師器があり、いずれも奈良時代に属するものである。

F地区Ⅲc層　F地区の西半、第1遺構面と第2遺構面の間に堆積しており、第1面のベースとなっている。遺物には、奈良時代の須恵器片をわずかに含むほかは、大多数が瓦器・土師器である。瓦器では、椀、小皿があり、土師器は器種の判断できない破片が多いが、大部分は甕と考えられる。また、椀の高台部もある。時期の指標となるのは瓦器で、12世紀中葉から末にかけてのものが多い。

G地区Ⅲc層　Ⅲc層とした中では、最も良好な包含層で、完形の瓦器小皿等も包含している。遺物には、弥生土器(高杯)1点、古墳時代(5世紀末)の須恵器片のほか、土師器・須恵器・青磁・白磁・須恵質陶器・瓦器・土錘等がある。(第29図、図版十六)

(50)～(63)は瓦器椀である。(50)は復元口径9.4cmを測る。器壁は厚く、口縁部外面は強いヨコナデにより外反気味になる。磨滅のためヘラミガキは不明。(51)は復元口径13cmを測る。磨滅が著しいが、外面に2段の指圧痕が残る。(52)は復元口径13.2cmを測る。口縁部はヨコナデの結果、外反する。内外面とも、横方向のヘラミガキを施す。外面ヘラミガキは疎である。(53)は復元口径11cm。内外面とも磨滅で、調整不明。(54)は復元口径16.6cmを測る。外面上位は横方向の疎なヘラミガキ、下位は2段の指圧痕が残る。内面の上位は横方向ヘラミガキ、下位はやや幅広のヘラミガキで、底部は格子状になるものと考えられる。(55)は復元口径13.8cmで、成形・調整とも(54)と同様のものである。(56)以下は底部および高台部分の破片である。高台径はいずれも復元径であるが、高台は歪みが大きいと考えられるため、誤差の幅も大きいと考え得る。最も小さい(62)で3.1cm、大きい(58)で6cmを測



第29図　包含層検出遺物Ⅰ・G地区Ⅲc層

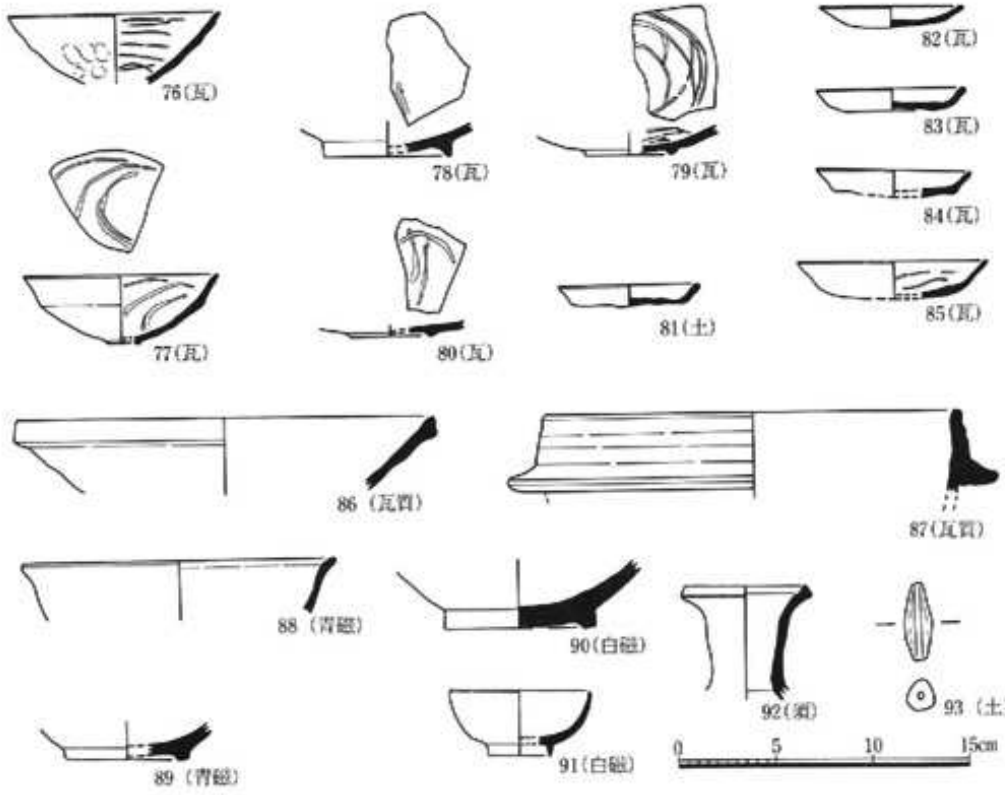
る。高台は低く、退化しているが、高台としての機能は有している。内面底部のヘラミガキは、斜格子（56～58・61）、平行（59・60）、輪花状（62・63）の3種類がある。

(64)～(71)は瓦器小皿である。(64)は復元口径8.2cm、器高2.3cmで、外面上位はヨコナデ、下位は指圧痕が残り無調整。(65)は復元口径8.8cm、推定器高1.8cm。調整は(64)と同じ。(66)は復元口径9cm、推定器高1.8cmを測る。外面上位はヨコナデ、下位は軽い指圧痕が残る。内面底部には輪花状ヘラミガキを施す。(67)は口径8.1cm、器高1.6cm。口縁部の強いヨコナデで、体部中位は段をなす。内面はラセン状ヘラミガキを施す。(68)はほぼ完形で、口径7.6cm、器高1.2cmを測る。平坦な底部から、やや外反気味に外傾する口縁部を有する。全体に灰白色を呈し、燻されていない。内面は、口縁部と底部の境に、ヘラミガキにより一重の円を描く。(69)は完形。口径8.8cm、器高1.6cmを測る。口縁部はヨコナデ、底部外面は指圧痕が残る。(70)は復元口径9.1cm、推定器高1.6cmを測る。口縁部はヨコナデ、底部外面は指ナデ調整。(71)は復元口径9.4cm、推定器高1.9cmを測る。口縁部はヨコナデ、底部外面は無調整。内面は平行ヘラミガキを施す。(72)は土師質の土錘で、完存する。長さ7.5cm、最大幅1.99cmを測る。重量30.6g。(73)は須恵質の鉢で、復元口径27.2cmを測る。篠系である。(74)は土師質羽釜で、復元口径20.6cmを測る。口縁部内外面はヨコナデ、以下はナデ調整。(75)も土師質羽釜で、復元口径26.6cmを測る。内外面ともヨコナデ調整。

Ⅲb層（第30図、図版十七・十八）　Ⅲb層はB地区を除く各地区に堆積しており、同一層である。包含する遺物の内容、状況とも差異は認められない。遺物は瓦器が多く、他に土師器、須恵器、瓦質土器、白磁、青磁、瓦、黒色土器A類（1片）、土錘があり、さらにサヌカイト製品として、石鏃、石小刀、剥片が含まれており、時期幅は広い。

(76)は瓦器椀で、復元口径10.8cmを測り、口縁部はヨコナデ、外面体部中位以下は2段の指圧痕が残る。内面体部は横方向の疎なヘラミガキ。(77)は口縁部から高台にかけての破片で、復元口径10cmを測る。口縁部はヨコナデし、口縁以下の外面は無調整。(78)～(80)は底部から高台部分の破片である。(79)はラセン状、(80)は平行ヘラミガキを施している。(81)は土師器小皿。復元口径7.2cm、器高1cm。平坦な底部と、外傾して短かく立ちあがる口縁部を有する。口縁端部は丸い。

(82)～(85)は瓦器の小皿である。(82)は口径8.5cm、器高1.1cm。内面磨滅で、ヘラミガキ不明。(83)は復元口径7.7cm、器高1.1cm。ヘラミガキは不明。(84)は復元口径7.8cm。ヘラミガキは不明。(85)は復元口径9.6cm。内面には横方向の疎なヘラミガキが残る。全体に灰白色を呈する。



第30図　包含層検出遺物II・III b 層(1/4)

(86)は瓦質の鉢である。復元口径21.6cmを測る。全体に10Y 8/1(灰白)を呈するが、口縁外面のみN4/0 (灰)。口縁部はヨコナデ調整、外面はナデ。内面は磨滅のため不明。

(87)は瓦質羽釜。口縁部は短かく、段をなしている。外面ナデ調整、内面口縁部以下は板ナデ調整で仕上げる。

(88)は青磁の鉢で、磁胎は10Y 8/1 (灰白)、釉は7.5GY 8/1 (明緑灰) を呈する。釉は薄く、細かな貫入が入いる。(89)は青磁碗の底部である。磁胎は精良で10Y 8/1 (灰白) を呈し、釉は2.5GY 8/1 (灰白) を呈する。高台径は約5cmである。

(90)は白磁碗の底部から高台部片である。磁胎は精良でN 9/0(白)、釉は緑白色を呈している。(91)は白磁小碗で、全体の器形が復元できる。復元口径7.1cm、器高5.3cm、高台径3cmを測る。釉はわずかに緑色を帯び、遺存部分には、内外面とも施釉されている。体部は内弯気味に立ちあがり、口縁端部は細く尖がっている。

(92)は須恵器壺の口頸部で、復元口径6.2cmを測る。内外面とも灰被り。

(93)は土師質の土錘。全長4cm、最大幅1.5cm、重量8.6gを測る。

Ⅲa層　Ⅲa層は層序の項で述べたように整地土層で、各地区に堆積する。包含遺物の構成はⅢb層と大差はないが、染付が加わっている。いずれも小片で、図化し得るものはほとんどない。また、量もⅢb層に比べ少なく、遺存状況も悪い。

(94)は中国産染付の碗もしくは鉢と考えられる底部から高台部の破片で、高台径2.6cmを測る。底部外面に「大明年造」の銘が見られる。本資料は、高台を残し、高台径と同じ大きさに円形に打ち欠かれている。意図するところは不明である。

第31図　包含層
検出遺物Ⅲ
Ⅲa層(1/4)
字は実寸

Ⅲc層の遺物について

A地区およびC地区のⅢc層の遺物は、A地区奈良時代遺構群と同様に8世紀後半に比定できるものである。F地区Ⅲc層、G地区Ⅲc層の遺物は時期幅を持ち、内容的に類似している。(54)・(55)は外面に指圧痕を残し、横方向の疎なヘラミガキ、内面は比較的ヘラミガキがよく残っており、12世紀中葉から末葉に比定することができる。(51)～(53)も同時期である。(50)は小椀とも考えられるが、肉厚の特徴的なもので、やや時期のさかのぼる可能性もあろう。瓦器椀高台部分は、高台の貼付けは比較的丁寧で、高台としての機能を保っている。内面のヘラミガキは、図化した以外のものでも斜格子が多い。やはり、12世紀中葉から末葉にかけてのものである。(62)・(63)については高台径はやや小さく、退化しており、ヘラミガキも輪花状である。13世紀前半に位置づけられるものかも知れない。瓦器小皿は、口縁部から底部にかけて丸味を残しており、瓦器椀と同時期と考えてよい。瓦器小皿に関して注意すべきことは、数量が多い点である。瓦器椀とセットとなるのは土師器小皿が普通であり、従来、多くの遺跡で確認されている。しかし、本遺跡においては、すべての層の遺物を見ても土師器小皿は数点の破片しかなく、図化し得るのもⅢb層の1点だけという状況である。これに対し、瓦器小皿の比率は他遺跡に比して多い。従って、本遺跡では瓦器椀――瓦器小皿というセット関係を想定しなければならない。

全体を通して判断すると、G地区Ⅲc層は12世紀中葉から末葉、あるいは13世紀前葉までに位置するものと考えられる。これはF地区Ⅲc層も同様である。

Ⅲb層の遺物について

(1)・(2)の瓦器椀は外面のヘラミガキがなくなり、内面のヘラミガキも疎になっている。13世紀前半のものである。高台部分には、12世紀後半のものを含んでいる。瓦器小皿は(8)・(9)のように平坦な底部から外傾する口縁部を有するものが目立つ。

瓦質鉢(11)は口縁端部を上下に拡張し、端面は外傾している。瓦質鉢の初源的な形態と考えられ、14世紀末葉から15世紀前葉のものであろう。(87)の瓦質羽釜は口縁部が短かく直立しており、15世紀代に属する。瓦質土器には他に甕の破片も含まれている。青磁・白磁はともに12世紀代から15世紀代に属する。

全体としてG地区Ⅲc層以降、15世紀代までと判断できる。

Ⅲa層の遺物について

Ⅲa層は整地層であり、その整地の時期を暗示するのが(94)の染付である。磁胎等からみて中国産であるが、銘文中の「造」の字が違っている。おそらく16世紀後半から17世紀にかけて、いわゆる明末清初の民窯の作品と考えられる。従って、日本に輸入され、廃棄されるに至った段階は江戸時代中頃を上限としよう。

包含層検出の石器について（第32図、図版十八）

今回の発掘調査で検出した石器は以下の4点である。他に剥片が若干量あるが、出土遺物の総量からみれば石器・剥片の出土量はわずかなものといえる。なお、出土した石器・剥片はいずれもサヌカイトを素材としている。

1．B面側に原礫面を大きく残した不定形な剥片を素材とし、素材剥片の一側縁に両面から急角度の調整を加え刃部を形成している。両端を欠損しているが縄文時代のサイドスクレーパーと考えられる。残存器長2.3cm、器幅2.32cm、最大器厚0.56cm、重量4.2gを各々測る。なお、素材剥片のA面側は遺存する範囲では全面ネガティブな面で構成されており、剥離面はいずれもヒンヂ状を呈する。

2．両端を欠損しているが凹基式石鏃で縄文時代のものと思われる。比較的丁重な急角度の調整剥離を両面から加えているが、一部に階段状剥離も認められる。残存器長2.515cm、器幅1.7cm、最大器厚0.405cm、重量1.3gを各々測る。

3．両端を欠損しているが先端部が下方に屈曲し始めており、弥生時代の石刀の公算が強